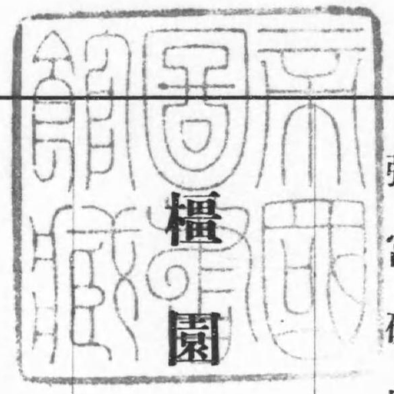
特 218
363

始

特218
363



櫺園文集抄

彌富破摩雄編

東京 新撰書院刊行

小序

近世の擬古文章家として、村田春海や、清水濱臣や、萩原廣道、黑澤翁滿等が、其の名を擅にしてゐるが、中島廣足も、此れに伍して、決して遜色のないことは、其の遺されてある文章が、雄辯に物語つてゐる。

本書は中島廣足の二百數十篇の文章の中から、殆んど代表的の約六十篇を抄出したもので、此れによつて文人としての廣足の面目を窺ふ事を得べく、而して其の抄出の標準としては、主として中等學校上級生徒の補習教材として、國語、國文の知識增進に資し、かねて幾分自然愛の明朗な情意教養の參考となるものに留意した。

前條の心しらひから、此れに適當な語句、文脈のもので、且つ餘りに長

からず(特別な一二を除いては)讀みて心地よく、味ひて情趣濃かなものを取つた。此れを以て此れを徹底的に理解する事によつて、上級學校の入學試驗にも、十分の自信を持つことが出來ると同時に、一般普通の國語知識も養成することが出來得ると信ずる。

猶注意を要すべき語句は、上欄に抽出した。故事出典は、專門的に亙らない程度のものを附記した。抽出語に關しては、類語を併記して參考とした。類語の標準は、大略

意義の上から　形式の上から　文法の上から

したが、時に多少說明的に傾いた所もある。此の類語の理解は、最も必要とする所で、本文に併せて、此れを十分に理解すれば、それは纏つた國語の普通知識の會得であることを斷言して憚らない。

抽出語は、本文のまゝを以つてしたが、單獨の時は、第四段形を以つてあげた。

抽出語の或語は、屢々揭げて參考とした。

特に注意を要する詞には、。を加へた。

練習上の參考のために、文によつては、句讀點を省略した。上級學校の入學試問には此れがないのが普通であるので、此れに觸れて置く要もあるからである。

昭和八年初冬

著者

目次

一　鶯告春……一
二　山家初春……二
三　餘寒……三
四　柳……四
五　燕……六
六　春月……七
七　閑中春雨……九
八　玉園山花宴記……一〇
九　山吹……一八
一〇　早苗……一九

一一　蚊遣火……二一
一二　夏月……二三
一三　竹亭夏月……二四
一四　船中納涼……二五
一五　夏旅……二六
一六　初雁を聞く……二七
一七　月……二九
一八　月夜聞琴……三〇
一九　山路菊……三一
二〇　故郷鶉……三二
二一　秋山……三六
二二　山家初冬……三七

二三　時雨……三八
二四　殘菊……三九
二五　氷……四〇
二六　氷初結……四一
二七　霰……四三
二八　雪……四四
二九　山家雪……四五
三〇　夕……四六
三一　瀧……四七
三二　井……四九
三三　山家井……五〇
三四　池……五一

三五 湖上眺望……五一
三六 漁邨……五三
三七 驛……五六
三八 古寺……五七
三九 羇中幽情……五九
四〇 岸頭待舟……六一
四一 鷺……六二
四二 橿園記……六三
四三 書齋記……六五
四四 夜學……六六
四五 書……六七
四六 畫……六九

四七 弓……七二
四八 物語文論……七四
四九 千代の柵の序……七七
五〇 おし花帖の序……七八
五一 大津繪帖の跋……七九
五二 蓬萊石記……八〇
五三 荻のまがきの詞……八一
五四 心の山里の詞……八三
五五 川づらの宿の詞……八四
五六 長松の二字に書き添ふる詞……八六
五七 本居大平に贈る……八七
五八 秋のやまぶみ……九二

橿園文集抄

目次

五九　金海山詣記……一二〇
六〇　樺島浪風記……一三五

ゆきげの風　雪氣の消、

またるゝものさへ　あらたまの年たちかへるあしたよりまたるゝものは鶯の解（拾遺集）

なかぬかぎりは　春來ぬと人は言へども限りはあのなじかなとぞ思ふ（古今集）

うちずしをるに　もたまたるゝほどのきちかき竹むらに、いはしのかたに

うらわかきもの　から。

にほひ　ものゆゑ

なつかしう　かをり

打ちつけ　ゆかしう

此の鳥の

一　鶯告春

年かへりても、ゆきげの風のみ、さえわたりて、のきばの梅だに、ほゝゑまねば、またるゝ物さへ、おもひたえて、なかぬかぎりはなど、打ちずしをるに、やう〳〵そらはれて、よもの梢も、ほのかにかすみそめぬるあした、出づる日影も、うらゝかなるに、いつしかと、したまたるゝほど、のきちかき竹むらに、いとたかう打ちなきたる、ふとみゝおどろかれて、まづいとうれしきに、はしのかたに、出でゐて見れば、こなたかなた、枝うつりしつゝ、あまたたび聲なくなるが、まだいとうらわかき物から、にほひなつかしう、打ちつけに、心のどかなるもげに此の

鶯の谷よりいづる聲なくば春くる事をたれか知らまし（古今集）

かつ〳〵　かつおもふ

とりの聲なくばと、ふることさへぞ、かつ〳〵おもひ出でらるゝや。

いまよりの花まつほどを、なぐさめよ、春つげそむる、その〻鶯

二　山家初春

年月の行くへも　年月の行くへも知らぬ山がつはたきの音にや春を知るらむ（拾遺集）

うちいづらむ　谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる浪や春のはつ花（古今集）

きえもあへず

年月の、行くへもしらぬ、山がつはと、よめりしやうなるすみかには、あらたまりし春のしるしも、なきものから、きのふけふ、はれわたりぬる日影に、峯のかすみも立ちそめて、やうやう瀧のひゞきのきこゆるは、うち出づらむ浪の初花のけしきもおもひしられぬ。されど猶松の雪は、きえもあへず。

うらわかき　うらがなし

谷よりいづる（在前）

朝夕風の身にしみわたるに、鶯のいとうらわかき聲に、なき出でたるは、谷よりいづると、まづうちずせられて、いとうれしや。

三　餘寒

こそ——しか　……しが

ぞ——ぬる

年かへりて、一日二日こそ、四方の山べも、打ちかすみて、やう〳〵春のけしきに、心ものどけう見わたされしか。さえかへりては、冬にもまされる山風の、いと身にしみて、雪さへをり〳〵うちちりつゝ、のきばのうめの、やゝ咲き出でたるも、しぼめるやうにて、にほひうせぬるこゝちするに、小松など、もてはやすにつけても、野べはるかにぞ、おもひやられぬる。

風さむみ、引きにもいでぬ、春野には、くる人まつの、いろやさびしき

あけくれのすさびには、たゞ埋火のみ、かきおこしつゝ、ふづくゑにむかふより外なきに、日かずへても、空のけしきなほらず。いとすさまじう、吹きあるゝ風に、立ちまよふ雲の色さへぞ、おどろ〳〵しきや。かくのみこもりをるも、いぶせきを、けふは初午にて、いなりまうですべき日なゝりといへば、さはきさらぎも、たちにけるよと、おどろかるゝにも、いとわりなき風のおとになむ。

風さむみ　形、語根＋（げさみ）
すさび　すさみ
ふづくゑ
おどろ〳〵しい
ぶせき
日なゝり　べかめり
きさらぎ　月の異名、むつき……
わりなき　ことわり

四　柳

柳は、ひろき庭の池のほとりなどに、うゑわたしたるはさらなり。門のあたり生ひたてるが、ほのかにひらけたるまゆを、行く手に見わたしたる、いみじうなつかしく、すむ人さへゆかしくぞおぼゆる。むかしは、都の大路のたてぬきに、いとおほくうゑられたりとかげにさくらにこきまぜたらむ春の錦は、また、しくものあるまじうこそ。六田の淀などいふ所は、歌によみなれて、名にきくだにも、いとをかし。もろこしの西湖とかいへるところを、繪にかきたるも、此の木によりてこそ、筆のゆくへもおもしろくは見ゆれ。催馬樂に、青柳が花と、歌へるは、いづれのやなぎにも、咲き出づめれど、もろこしにて、柳絮とへるは、此の國にはいとまれ〳〵にこそはありけれ。のどかなる朝風に、これが打ちちるけしき

ひらけたるまゆ　ひらきたる戸
たてぬき
げに
こきまぜたらむ　見渡せば柳さくらをこきまぜて都ぞ春のにしきなりける（古今集）
六田淀—吉野川の一部
だに　さへ　すら
西湖　浙江省杭縣にある湖水、湖畔に柳多きを以て名がある
馬催樂　大路にそひて、のぼれるあをやぎが花や、あをやぎが花や

の、雪のやうにて、いとをかしきを、うたによめるが見えぬこそ、くちをしけれ。

大正十四年度
廣島高等師範學校入學試驗問題

とらへつ。ぺ。くて（つぬたり）＋（べしましはかり）

ひぢをふくみつゝわらべ（うなゐ）

いつの……か（不定稱）

おほしたる（はえたる）

五　燕

「いとうらゝかなる日おもふどちうちつれゆくおほぢにつばくらめのこなたかなたとびむかひてふと袖のしたを過ぎたる手にもとらへつべくていとをかし雨のなごりの猶かわかぬかたなどにおりゐてひぢをふくみつゝわらべのはしりくるにおどろきたちてとほくかけりゆくもをかしうつばりにすくひていつのほどにかあまたのひなおほしたるが飛びくるおやをまちて口のかぎりひらきつゝなきさわぎたるさまはいみじうこそあはれなれ」（以上問題）

もたる（もてる）

子安の貝とらむとて（竹取物語に見えてゐる）

あなゝひ

もろこしにて云々（此の事、南史に見ゆ。王整の姉が寡居してゐる戸に燕が巣くひつてゐるを見た燕の結び文つけてにこの事を記した詩を作つた。）

うつろひ（うつり）、褪色、

まだしき（移映）、まだき、まだ……

日のにほひ（かをり）

そこはかとなくなまめかし

これがもたるこやすの貝とらむとてあなゝひよりおち玉ひけむ君のさまおもひやるも又をかしもろこしにてあかき絲つけたりしがまたの春かへり來て後のよをさへちぎりけむなどげに心あるとりならむかし（句讀點省略）

六　春　月

梅はとくうつろひて、さくらはまだしきほど、つれ〴〵とながめくらしたるそらに、めづらしくさし出でたる月の、にほひふかう、そこはかとなく、かすみあひたる梢どもの、いとゞなまめかしう、身にしみておぼゆるは、げにしくものもなき、

あくがれありく

あらましごと
あいなきすきごゝろ
いもねられず
いもねず
いねず
ねず
四段活
ナヘン
ラヘン　Ⅰ＋る
其の他Ⅰ＋らる
其の他Ⅰ＋らる
たど〳〵し
あかり行く

夜のさまになむ。かやうなる夜に、おもふ友とあひのりてなにがしの山里わたりを、あくがれありかむに、かなたよりもおなじさまなるが、笛ふきすさびなどしつゝ、來あひたる車のけしきも、おぼつかなきほどの月影、いかにをかしかりなまし、などあらましごとに、おもひつゞくるも、あいなきすきごゝろなりや。ふけゆく風は、まだいと寒きに、すだれはおろしたれど、いもねられず、やう〳〵夜もみじかきほどおぼえて、山寺のかねのおとに、おどろきがほなる、からすの聲もをかしうきこゆ。又もたちいでゝ見れば、入りがたの空はまして、いと深うかすみて、月のゆくへも、たど〳〵しきに、すこしあかり行く山ぎはのけしきは、まことに、ちゞのこがねにも、かへつべくなむ。

さらでも
さ……
さすが
さながら
されど
さて
さこそ
さぞ
さばかり
ゆくりなく
めり
べし、らし
はた

七　閑中春雨

花盛はさらなり。さらでも、柳など、あをやかに打ちけぶり、うら〳〵と、てりたる日は、わらび、つく〴〵しなど、いかならむと、野山のさまのみ、こひしう、おもひやられて、いほのうちには、こもりゐがたきを、人さへゆくりなく、とひきつゝ、ちかきわたりにて、いざ〳〵など、そゝのかすめり。雨のふる日は、さることも、おもひたえて、人はた、おとづれねば、文机にのみ、よりゐたる、なか〳〵にをかしうなむ。かやふける軒は、雨のおとしづかにて、池水のあや、こまやかなるに、いとふかう、かすめる梢より、翅しをれたる鳥どもの、そこはかとなく、

とびわたるなど、いといたうをかし。くれぬればまして、いとしめやかにて、見るふみさへ、今一きはこゝろしみぬ。風すこし吹き出でゝ、とうだいの火の、またゝきたるに、何ともしらぬ花の香の、ほのかに、打ちかをりたるもをかし。

諏訪神社
長崎市西山郷國幣中社、建御名方命等を祀る

みはし

みづがき
玉がき
いがき

大宮司
代々青木氏宮司となる

八　玉園山花宴記

長崎の里なる、諏方の御社の山は、其名を玉園といへり。麓よりはるゞ〳〵のぼる、みはしのこなた、かなたは、さらなり、みづがきのめぐり、廊のあたりまで、櫻をいとおほくうゑなべたる。大宮司の家の園はた、いとおほきなる樹の、年のはじめに、さき出づるさへありて、春毎の花の盛は、たゞ白雪のお

永章
青木氏、弘化二年七月十日歿五十九

うちひさす
あまさかる

あげまり

いとたけ

あへせらる
あるじせらる

りゐるごとく、めもあやになむ覺えぬる。されば此の里の人は、さらにて、とほき國々より、來ゐる人も、春はたゞ此の花の本につどひ來て、酒くみかはしつゝ、心をやるめり。今の大宮司、永章ぬしは、うち日さす、都の人にしあれば、よろづのみやびいたらぬくまなく、ものせられて、其のみち〳〵の、まじらひおほかるを、おのれ、はたいにしへ學びの友として、はやくより、またなくむつびかはしきぬ。されば此の山の花盛には、其の木かげに、幕引きわたしつゝ、其のみち〳〵の、人々をつどへて、あるはあげまり、あるはいとたけ、あるは歌よみなど、せらるゝ、其の歌のむしろには、おのれも、もるゝことなし。かくてまた、むかしよりのためしにて、此の里に來ゐるから國人をしも、花の盛ごとに、あへせらるゝ事あり。近

さはらふ
うつろふ
ことし
天保九年
おこせらるゝ
おこする、まつはるの活用
巳の時
午・正午
子・中夜
火にやくなる
III
IV
＋なり
たまはりぬ
たまふ

きとしごろは、さはらふことのみありて、おこなはれざりしを、ことしはことに、春の光もうらゝかに、花のにほひもそひぬればとて、其のことおもひおこされしは、二月の末つかたなりけり。かねて其の日を、つげおこせらるゝに、いとめづらしかるべきことなれば、朝とく行きて、まちをるに、巳の時ばかりより、おほくのから人ども、打ちつれきぬ。まづ御社の花ども、見ありきて、大前にまうづ。かの國のならはしとて、ちいさき紙に、物かきたるを、いとあまた、火にやくなるは、其の氣にあたりて、身をきよむる心ばへなるべし。手をさゝげて、たちゐ、をろがむさまも、いとめづらしく、さながら繪に、かきたるやうなり。神つかさ、大御酒とりおろしたるに、いかに思へるにか、年老いたるたゞひとり、ゐざり出でてたまはりぬ。かはらけ、さゝげたるさまも、いとたど〳〵しく、こなたの人の、をしふるまゝに、いさゝかのみてしぞきぬ。

かはらけ
をけ、くしけ
たど〳〵し
まらうどゐ
しつらはれたる
ゐやなく
ゐやゝか
ひざし
おもゝち
おやこ—永章と永古

かくて大宮司のまらうどゐには、簾かけわたし、花むしろしきつらねなど、いときよらに、しつらはれたるに、上のかたには、船長をはじめて、其のかたざまのよろしきかぎり、十八人いとうるはしくゐなみたり。間を隔てゝ、下の方には、從者（メサ）めくもの、いとあまたうちまじり、やがてよりふしなど、ゐやなく、みだりがはし。言つたふる人をはじめて、上・中・下と、こなたの人々も、いとおほく、ゐこみたり。ひざしには、守部のつかさ、いかめしき、おもゝちして、さしはなれゐたり。大宮司、おやこいでゝ、酒さかな、何くれと、もてなさる。盃三かへりばかりして、なほあなたにてをとて、此の十八人、ことさら

にともなひて、おくのはなち出にて、あへせらる。こゝにおのれも、ものせよとあればゆきぬ。女がたには、大宮司の母君、家刀自、先の大宮司のむすめなど、みないでゝ、もてなさる。まづ家とじの妹なる人、今やうの茶をたてゝすゝめらるゝに、又ことに、かの國ざまに、ものしたる、をしものども、まろき机めく物に、くさ〳〵もりて出だされたる、三四人づゝ、さしむかひゐてさうどき、くふさま、もをかし。家刀自の妹なる、さうの琴ひかるゝに、から人ども、みなゐざりよりて、心とゞめつゝきく。譯士にやありけむ。いみじう、ゑへるが、から人の、うへのきぬとりきて、さるがうごとしつゝ、袖打ちふりまひ出でたる、いみじう興ありて、から人どもゝ、わらひのゝしる。みな人かしこまりなく、打ちとけて酒のむにも、たゞ

家刀自 家あるじ
をしもの
さうどき さう〳〵し
さうの琴 きんのこと
さるがうごと 猿樂、猿樂の能
かしこまりなく

譯士して、大かたのことゞも、つたふるのみにて、たゞに詞のかよはぬぞ、いとくちをしかりける。楊覺三・陸琴江などいへるは、みやび事好めるものにて、けふのおもしろき花の、めでたき事など、からうた、つくり出でたる。人々扇あまたさし出でゝかゝせなどす。かのまらうどゐのかたは、いとあまたの人なるに、おなじさまにて、かずしらず出だされたるあへども、いたらぬくまなき、もてなしなるべし。みな人ゑひしれて、申の時ばかりにかへる。おくりものども、さまざまありしなるべし。けふのうたげよ。日うらゝかにてりて、ほのかにかすめる梢ども、いとおもしろく、うみのかたは、る〳〵見わたされて、からのも、こゝのも、あまたうかべる船ども、島々・浦々ののぞみざへ、たぐひなきに、から人どもは、お

あへ
申の時
うたげ

ゑひさまたれたる

のが國には、たえてなき花の、かくさきみちたるあたりにて、みくにのさけの、いみじきをのみて、ゑひさまたれたる、又なく心ゆきて、うれしげなるけしきも、いとめづらしく、をかしくなむおぼえぬる。こはたゞ、こゝのあらましなれど、のちのおもひ出ぐさにとて、しるしとゞめたるを、やがて永章ぬしに、おくれるになむ。

春ごとの、花のあそびは、つくすとも、げふにいる日は、あらじとぞおもふ

此後この宴、としごとに物せらるゝを、ことし天保九年の彌生なるは、ことにさかりにて、から人六十人、こゝの人々、すべての、まらうどをあはせて、二百人にや近かりけむ。おのれ、例のあしたよりものして、まじらひあそ

すのこ
はしゐ

えとらねば
え…す

びつるに、こたびは、まうけなども、いとことにて、さまざまのもてなし、かざりなかりし也。このはなち出の、すのこのかたに、賀茂山のあふひ草を、かめにうゑたるが、いみじうさかえたるを、おかれしに、から人ども、あつまり見て、其の名をとひ、ものにかきつけなどしつるは、かの國には、なきものなるべし。陸品三といへるは、皇國に久しくとゞまれるにて、今はから國にも、かへらじと、おもへるなるべし。手よく書きつるを、今は右の手しなへて筆をもえとらねば、左にてものするを、猶其いきほひ、見えたるもめづらかなり。こたびのから人、いとあまた、其の名をしるしおきつれど、くだ〳〵しければ、こゝにはあげず。

おきてざりける
源氏物語、幻の巻に見える
らうたき
ものから

九　山吹

さくらは散りはてゝ、やう〳〵青葉に成り行く庭に、今を盛りと咲きみちたる山吹の、のどかににほへる花のいろは、いみじうなつかしく、これなくば、のこれる春日も、何にかはなぐさまゝしとおもふに、いとゞみにしみてあはれなり。さるは、八重なるが、ふさやかに、にぎはゝしく咲きたるは、しなたかくは、おきてざりけると、紫の筆ずさびに、ものせられたる、げにひとへにさけるが、あてに、らうたきには、及ぶべくもあらぬものから、なほとり〴〵、あはれなる花のにほひ妹に似るとか、ふるき歌にも、よめるもさる事になむ。されど口

いぶせく

たなひぢ
みなわかきたり
むかもゝ
ひぢかきよせ
ふるきふみ
新年祭祝詞
みとし
年、稲
いたつき
めこ
うゝべき
植、据、飢
うゑしろぐさ

なしの、色にしも咲きたるは、いかに、いぶせくやとおもひやるも、あいなきわざなりや。

一〇　早苗

たなひぢに、みなわかきたり、むかもゝに、ひぢかきよせと、ふるきふみにいへるは、みとしつくるわざの、いたつきを、をかしくいひとれる、ことのはになむ。げに此のさなへとるほどこそ、しづがしわざは、いそがはしく、くるしげにみゆれ。きのふけふ降りしきる雨の、はれまゝち出でて、めこ打ちつれつゝ、いそぎたつめり。をのこどもは、まづうゝべき、田のもをすきかへしつゝ、かたへより、せきいるゝ水に、うゑしろ

ふみしだき
おのがじゝ

つかねゆひたるを（ゆふ、むすぶ）

いそぐめれば
さばかり
ゆふつけゆく（夕附日）

ぐさとて、何くれの草ども、かりもてきたるを、こなたかなた、うちゝらし、ふみしだきなどす。わかきをのこどもは、わりなく、ひぢにそみて、おのがじゝ、たはぶれあへるを、老人いできて、又も雨ふりぬべし、いそぎてよなど、いふもをかし。此のほどめこどもは、わかなへをひきて、よきほどに、つかねゆひたるを、とり〳〵、になひもて來て、こなたかなた、わかちおくを、かつ〳〵とりて、うゑわたす。其のをりは、をとこも、女も、一つらにならびたちて、あやしきうたども、たかやかに、うたふも、むかしおぼえて、なか〳〵にをかし。大かた、此のはれま、まち出でたる日は、かたみにあらそひつゝ、里ごとに、いそぐめれば、さばかり、廣きたのもゝ、いつの程にか、あをやかに、うゑわたしつ。ゆふつけゆくまゝ、風ふきいでゝ、打ちち

なのりたる（なきたる）
してのたをさ

むとく

る露も、すゞしげなるに、かたへより、すみゆく水に、月の影さへ、ほのめきたる、えもいはずをかし。みのをがさ、何くれの物、とりしたゝめつゝ、うちつれかへるすがたどもの、あやしげなるに、またもふり出づるさみだれのそらに、ほとゝぎすの、二こゑ、三こゑ、なのりたるは、しでの田長となづけしも、しるく、をりさへいとをかしうなむ。

二　蚊遣火

ひるのほどのあつけさは、水の上さへ、むとくにて、いとたへがたかりしを、やう〳〵日影もかたぶきて、木のまより、そよき出づる風の、いとすゞしきに、ゆあみなどして、立ちいづれ

わすられぬ

ふせや
あばらや

火をけ
櫛笥

いぶせく

かはほり
扇子

ば、月の影さへ、ほのめきて、ひるのくるしさも、かつ〳〵わすられぬ。やゝとほくゆくほど、みちのかたはらなる、しづがふせやより、烟のいとしげくたちのぼるは、かやりふすぶるにやと、おもふに、おほきなる火をけに、なにゝかあらむ、あをやかなる木葉を、いとおほくさしいれて、こなたかなた、あふぎちらすは、いとあつかはしく、見るめもいぶせくて、急ぎ歩みすぎて見れば、やう〳〵、うすらぎ行くけぶりの、杉の梢にたなびきたる、霞おぼえてをかしさに、かはほりさへ、みつふたつ、とびかひたる、ゑにもかゝまほしき、けしきになむ。

一三　夏　月

あぐら
椅子、趺坐、胡床、代、足代

とばかり
とよる、とかく、ともすれば

こてふ
月夜よしよゝしと人につげやらばこてふに似たりまたすしもあらず（古今集）

さう〳〵しかなり。
騒々し

川づら
川面、海面

水そゝぎたる庭に、からめいたるあぐらする ゑて、夕風まちすゞむほど、山のはあかくなりて、松の木だちもあらはなるに、ほどもなく、さしいでたる、月影いとすゞしく、やがてうす衣の袖に、すきとほりたる身を、かへたるばかりになむ。とばかりながめゐたるほど、こてふに似たりやとて入りくるは、まちしもしるき、なにがしなりけり。家のうちは、猶あつかはし。やがて此の池のほとりにてこそとて、おなじさまなるあぐらに、さしむかひつゝ、わらはよびて、けしきばかりとりまかなはせつ。池の魚どもの行きかふさゞなみ、月のかげにきらめきて、いとすゞしさも、まさりゆくに、かくてのみは、さう〳〵しかなり。なにがしのなり所、川づらのけしきなど、こよひの月にこそとて、うちつれて立ちいづるこゝち、

又一きはおもしろきに、ゆく〳〵うめきいづ。

うすごろも、たもとしめりて、吹く風も、いとはしきまで、すめる月かな

一三　竹亭夏月

一むらさめのすぎつるなごり露しげくうちゝりまがひて吹きならす風のおともいとすゞしきに花やかにさし出でたる月の軒ふかくさし入りたるおきふしなびく葉かげやう〳〵えだわかれゆくわか竹のすがたなどとこもあらはにうつり來つゝえもいはずをかしき夜のさまなるにげに此の君なくばとから人のむかしさへ思ひ出られてなむ。

（句讀點省略）

此の君なくば　晉書王徽之傳、嘗寄居空室中、便令種竹、或問其故、徽之但嘯詠指竹曰、何可一日無此君

なにがし
くれがし

すぐしがたげ　形、語根＋げ

さるべき磯かげ　さ……

一四　船中納涼

かの船は、なにがしがにや、こなたなるは、くれがしなるべし、などいひつゝ、こぎくるに、松の木蔭も、柳がもとも、つながぬ所なく、いづれも〳〵、いとすゞしげなるよそひにて、歌などよみかはしつゝ、いみじう心ゆきたるけしきなりけり。此のごろのあつけさは、家のうちにては、すぐしがたげなるを、ちぎらねど、みなおなじさまに、うかれ出でぬるも、をかしうおぼゆ。かたみによびかはし、打ち興じつゝ、こなたに〳〵といふに、すこし、しづけからむあたりをと、やゝ沖のかたに漕ぎゆきて、さるべき磯かげにつなぐほど、日も入りはてゝ、

なみふきわたる風のけしき、たゞ秋とのみおぼえて、袖さへさむきばかりになむ。

一五　夏旅

えあゆまねば　え…ず

人のおとなひ　まかなひ、うらなひ

ひるのまは、あつさたへがたくて、はか〳〵しうも、えあゆまねば、あさかげのほどにこそはとて、とりの聲とゝもに、おきいでゝゆくに、ありあけの月、くまなくすみわたり、なみ木の松風、すゞしく吹きとほりて、ほろ〳〵とこぼるゝ露の、たもとにかゝれるもいとこゝちよし。みちのかたへなる田のもに、人のおとなひのするを、なにゝかと見れば、車の上にのぼりゐて、水ふみいるゝなりけり。よるさへかゝるわざするは、いかばかりかは、くるしからましとおもふに、わが旅のうさも、いさゝかなぐさみぬ。ほどなく、あけ行く横雲のそらに、やまがらす飛びわたりつゝ、日ぐらしのなき出でたるなど、いみじうをかしきに、いなばの露の、所せきまで、おきわたしたるが、葉末にのぼりて、かつ〳〵こぼるゝさま、見るめもいとすゞしくおぼゆ。さし出でたる日影の、やう〳〵たかく成り行くに、けふこゆべき、なにがしの山路、おもひやるも、まづいとくるしう。

所せき　道もせにちる山櫻花

かつ〳〵

一六　初雁をきく

かすみていにし　春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋霧の上に（古今集）

かすみていにしと、いひけむあけぼのも、きのふばかりと、お

ひがみゝ
ひがめ
ほど
程度、時間
いなおほせどり
わが門に稻負鳥のなくなべにけさ吹く風に雁はきにけり（古今集）
いつしか
未來、過去
こゝらの友
こゝだ
まどはさて
ひめしまの昔
姫島に雁の卵を生んだことが仁德記に見えてゐる

ぽゆるに、あきゝりのうへに、なくなる聲の、ほのかにきこゆるは、ひがみゝにかと、たどらるゝほど、いとちかくなりて、此の軒場なる山を、こえくるが、めにさへみえたる、いとめづらかに、をかしうなむ。げにこのごろの、ゆふかぜは、いたう身にしみて、いなおほせどりさへ、門田ちかく打ちなきつるに、いつしかとは、おもひしものから、けふしもかくて、待うべしとは、おもはざりけり。あはれ此のとりよ、とこよの國の、はるけきさかひに、すみながら、秋ごとのちぎりたがへず、こゝらの友を、まどはさで、ちさとの雲路を、分くめるは、ひめしまの、むかしもおもひ出られて、あはれになつかしきに、花にうらみし、こゝろあさゝも、今なむおもひしられぬる。

しつらはれたる
しつらふ、つくる
よのつねなり
いふもさらなり
かのすまのまき
源氏物語の須磨の卷
二千里の外古人の心
三五夜中新月色
二千里外故人心
（白樂天の詩句）

一七　月

紫の筆すさび、よむ日のけふに、あひぬるもをかしきに、東にむかへる家、いとはれ〳〵しう、しつらはれたる、あるじのみやびごゝろさへ、おもひしられてなむ。こよひは、月をこそはとて、文机おしやりつゝまちをるに、いと清う、すみわたれる空の、くるゝもまたず、さし出でたる月かげ、いとはなやかにて、ちりばかりのくまもなきに、うちむかひたるこゝち、うれしといはむもよのつねなり。かの、すまの卷に、こよひは十五夜なりけりと、おぼしいでゝとかき、二千里の外、古人の心と、すし給へる例の、泪もとゞめられず、などいひなしたる

詞のにほひも、いとゝ身にしみておぼゆるに、

秋の夜の、月のさそへる、おもかげは、すまもあかしも、めのまへにして

一八　月夜聞琴

はるかにさそふ松風は、おもふかたにやと、たどりくるに、ひかりさやけきあさぢが露、なきしきる蟲のこゑ〳〵、やうやうきゝわかれ行く、つまおとの、いとなつかしきに、駒のあし音や、きゝしらるゝとて、とほくのりはなちつゝ、やをらあゆみよれば、ふけゆく月に、もよほされて、打ちとけ、ひきゐたるなりけり。ふと、こわづくらんも、さすがにて、こしばがきの

さすが
さ……

もとに、しばしたちやすらふほど、にはかに雲がくるゝ月も、こゝろありげなり。

一九　山路菊

木々のもみぢ、むら〳〵染めわたして、をばなが袖も、人まちがほに、うちまねく山みちの、いとおもしろきに、女郎花・蘭などの、やう〳〵うらがれゆく中より、今咲きはじめたる菊の露もとをゝになびきいでたる、物よりことにめにたちて、いとなつかしうおぼゆ。此の花ひらきてのちなど、打ちすつゝ、さかしきいはねをつたひのぼるほど、水おとさへさやかにて、やう〳〵山ふかくなるまゝに、谷川のながれ、岩のは

やう〳〵
うらがれ
とをゝ
たをゝ
此の花ひらきてのち
此花開後更無花（和漢朗詠集）
さかしき
かしこき、賢、長

ざまなど、こと草もまじらで、いとおほく咲きみだれたる。こき、うすきさま〳〵いろをつくして、いとかうばしく、浪になづさふ枝ざしさへ、あはれになつかしきは、まことに仙人のすみかに來たるこゝちなむせらるゝ。

なづさふ　なづむ

二〇　故郷鶉

なにがしの野のはぎ、いまなん盛にて、花のさまもこと所に似ず、うづらの聲さへをかしきをりなりといふに、これかれともなひて見にゆきけり。げにきゝしよりはまさりて、そこら廣き野に、咲きみちたる花のにほひ、夕日の光にはえて、からやまとのにしきを、しきまじへたらむやうなるを、おもふ人どち、かくてあひみるは、またひときは、こゝろゆきておもしろし。昔このわたりには、人の家居ありけむことはしるきを、いつのほどにか、かくあとだにもなく、秋の花野とあれはてにけむ。いかなる人の、いかにしめたりし、まがきの花のねざしにかなどいへば、げにすみこしさとのむかしは、しのぶにも猶あまりてなどいひつゝ、すゞろに、なみだもゝよほされて、そこはかとなくあくがれゆく。露吹きむすぶゆふ風、いとゞ身にしみて、ちりまがふをばなは、雪うちはらふ袖かと見えたり。なき出づるむしのこゑ〳〵、松むしのはなやかなるなど、われかとゆきてと、艸のもとさへなつかしくて、こよひはこゝにやどりてを、などいふほど、はる〳〵と霧こめたる末野のかたより、小鷹するたる人の、あまた出

なん　Ⅲ Ⅱ Ⅰ＋なん

げに

そこら

おもふ人どち　友とち、友だち

いつのほどにか

いかなる……にか　いか……か

すゞろ　そゞろ

われかとゆきて　秋の野に人まつ蟲の解すなりわれかとゆきていざとぶらはむ（古今集）

できたるは、げふしも、守のぬしの、此の野べにかりし給ふときゝつるを、今かへり給ふにやとおもふに、わづらはしくて、たかう、むらだちたるすゝきのかげに、たちかくれつゝ見れば、かりぎぬすがたどもの、さるかたに、をかしきが、ことりさま〳〵ひきつけて、いかめしげに、やなぐひおひたるも見ゆ。にはかに、打ちしぐるゝそらのけしきの、えんなるに、ふることなど、打ちすしつゝゆくもあり、うちみだれて、わらひのゝしるもあり。なにがし、くれがしのよそひこそ、ことさらめきてもなど、はるかにみしりて、こなたの人々もいふ。いでやみやこにては、ずれうとて、何ばかりならず、なほ〳〵しきはに、世の人もあなづりいふめるを、くにには、なほいきほひことにもありけるかな、などいふもあり。なごりなく、

かりぎぬすがた　布衣
さるかたに　さ…
やなぐひ　えびら
のゝしる　そしる
ずれう

しづかなる野べの、はれゆく雲間より、さし出る月影、いとさやかにて、草葉の露さへ、きら〳〵と見えたるに、よしある松かげにゐて、とばかりながむるほど、かなたの草むらに、二聲、三聲、いとたかう、うちなきたるは、いかでのがれけるならむと、いとゞあはれも、ふかくおぼゆるに、

ふる郷の、むかしをとへば、あきはぎの、花野の露に、うづらなくなり

月くまなく、すみのぼれば、

故郷の、あさぢが原に、すむ月を、うづらの床に、ねても見て しが

など、ひが〳〵しきことゞもいひつゞくめり。

とばかり　と…
見てしが　こそ…しか
ひが〳〵し　まが〳〵し

あながちに
しひて

二月の花
停車坐愛楓林晩、霜葉紅於二月花（三體詩）

三　秋山

雨すこしうちそゝげどかばかりおもひ立ちつることはとてうちつれいづふるともなくて晴れぬるはこのごろの空のならひなめりいとしげき草葉のつゆをふみわけゆくもあながちなる山ぶみなりやおもひしもしるくいとこくそめわたしたる紅葉の霧のたえまより見えたるけしき二月の花よりもとかいひけむやうにあはれふかう身にしみておぼゆるにゆふ風さむく吹きのぼる谷のあなたにいとほそき聲にてはるかに打ちなきたるは鹿なりけりと思ふにいとめづらしく人々耳たてたるほど二聲三聲なきそへたるあはれいみじき山ぶみのかひよとおもふにおくれし人々もこひしくなりぬ（句讀點略、以下註セズ）

かひよ
ひとく、つゞれさせ、擬聲の音

うつろひ
うつる

吹きしをる
萎、撓、萎

なばーぬべし

世のうきよりも
山里は物のさびしき折こそあれ世のうきよりはすみよかりけり（古今集）

三　山家初冬

ちりつもりたる庭のもみぢも、ふみわくる人なく、うつろひのこれるまがきの草も、吹きしをるみねのあらしの、いとい
たう心すごきに、かくてやう〳〵冬ふかうなりて、雪さへふりつみなば、柴人のかよひも、たえぬべしとおもふには、世のうきよりもとか、今さらたへがたきさびしさになむ。
とふ人も、いまはあらしの風のみや、わがしばの戸を、うち
たゝくべき

二三　時雨

かみな月にもなりぬれど、もみぢはなほうすいろにて、菊のみやう〳〵盛なるは、いたう時おくれたる年なるべし。きのふけふ、ことにはれて、うらゝかなる日影は、さすがに小春とかいふやうにて、うかれも出でぬべく、おぼゆるに、雲たちいでゝ、山かぜあらましく吹きおろしつゝ、さとふりくる雨のあわたゞしきは、まことに冬のしるしにて、いとをかしく打ちながめらるゝに、きれ〳〵なる雲の立ちまよひつゝ、かたへ晴れゆくも、げにさだめなき空のけしきになむ。

うれしくも、そゝぐしぐれか、つゆじものしたぞめうすき、

出でぬべく

ながめ　眺、詠

つゆじも　つゆしも、やまがはーやまかは

木々のもみぢに

二四　殘菊

今の世に、菊うゝる人は、こちたく、すぐりなせる盛の花をのみ、もてはやして、すこしいろかはりぬれば、おもひすてゝ見もやらず。問ひくる人、はたなかりけり。やう〳〵霜おきて、をり〳〵打ちしぐるゝに、紫だちて、にほへるいろはうつろひ、さかりとて、むら〳〵の人のめでつるも、げにことわりに、中々あはれふかう身にしみておぼゆるが、しばしもそむかれぬまがきの花よ、歌よむどちの、心ならひに、ともすれば、今やうのさまの、いひくたさるゝも、此の花のためには、心淺

紫だちて
にほへる
げにことわり
中々あはれふかう
いひくたさるゝ　くたす、くだす

くしもあらじかし。いにしへのみかどの御歌に、

　此ごろの、しぐれのあめに、菊の花、ちりぞしぬべき、あたら
　　その香を

とよませ給ひしも、かみな月のことになむありける。

いにしへのみかどの御歌　此の歌は類聚國史にある、桓武天皇の御製。菊の歌の最初のものと傳へられる

二五　氷

いといたう、さえあかしたるあした、やり戸おしあけて見れば、おもひしもしるく、霜いとしろくおきわたして、池のおもては一つらにこほりて、かれたるあしの、とぢられたるが、ほのかに打ちそよぎたる風も、いみじう寒けきに、水がめの水、はたいとかたくこほりたる、ひさごさし入るべくもあらず。

寒けき　**ひさご**　瓢、杓、

やう〳〵ゆわかしもて來たるに、手あらひなど、とかくしつゝ、火をけに打ちむかひたるほど、日かげさしいでゝ、とけゆくしものけぶりも、いとをかしう見ゆるに、門の方に、わらはべの聲かしましく聞ゆるは、何ならむと、はじとみよりさしのぞけば、かゞみのかたしたる氷の、おほきやかなるに、穴うがち、繩さしとほして、になひもてありくなりけり。袖もしとゞにて、すべりたふれなどしたるも、いとをかしう、おのがむかしさへおもひ出られて。

ゆわかしもて來たる　いひもて行けばほど

かしまし　かまびすし

はじとみ　蔀、格子

しとゞ

たふれ

二六　氷初結

をぎの葉おとも、うらさびて、更け行く夜嵐の、いたう寒きに、

うらさび　うらがれ

いたう

ふすま 衾、襖
かつぎ
とみ
老のさが
すびつ
わびし
しぬらん
はしのもと 橋、階

とひ來る人もなければ、ふすま引きかつぎ、打ち臥したる、とみにもいねられぬぞ、老のさがなめる。すびつの火も、たえ〳〵にて、いとながき夜のわびしきに、板戸のひまのやうやうしらみ行けば、明けぬなめりと、いとうれしく、やをらおき出でて開きみれば、有明の月の、さし出でたるなりけり。庭の落葉も、霜ふかく見えて、かけひのおとの、ほのかになりぬるは、こほりやしぬらんと、こゝろみに、はしのもとなる水がめの、ひさご取りて、引きあぐれば、手にもさはらず、くだけたる氷の、いさゝかつきて、あがりたるが、月のひかりに、きらめきたる、いとめづらかに、をかしうなむ。

降りきほふ きそふ
おどろ〳〵しう
はつかに 僅に
ゆかし なつかし
みじろき
はらめき

二七　霰

ねざめがちなる老の夜床に、山風寒く吹きとほして、一しきり降りきほふは、しぐれにはあらで、あられの音なりけり。ほどもなき槇のいたやは、まくらの上に散りかゝるやうに、おどろ〳〵しう、雲のたゝずまひも、おもひやられて、いみじうこゝろすごきに、月の光の、はつかにもりくるは、かたへはれたるにやと、そらのけしきもゆかしければ、窓あけてや、ながめましと、みじろきるたるほど、又もはらめきおつるおとのはげしきに、心よわくふすま引きかづきて。

つぼ　つぼ庭、前栽

おのれおきかへらん

つひにもみぢぬ　雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ（古今集）

くま

二八　雪

花紅葉のたぐひなきにほひはあれど猶雪の光こそいとをかしけれほどなきつぼのうちだにときは木の枝おもげにうちたわみてはらふ人なきをうらみがほなるに松が枝のいたううもれたるおのれおきかへらんほどもくるしげに見ゆつひにもみぢぬといひけん緣さへあやなくふりかくされていとおもしろきあけぼのゝけしきなり木のもとのいさゝかくまあるかたにすゞめの三つ二つおりゐたる何を見つけたるにかあらそひてあさるさまなどとりあつめてをかしうげにかゝる雪にははむべきものもなきにやと

さうゝし

がな

ふくつけ

あはれに見ゆひとりのみかくて見るがいとさうゝしきにとふ人もがなと門のかたを見わたせばわらはべのあまたはしりありきつゝ雪いとおほきやかにまろばさんとふくつけかるさまはなにの思ふことかあらむと見えて過ぎしむかしも戀しうなむ

二九　山家雪

あさぶすま　あつぶすま

くれわたる峰の松風ふきしきりて、いとといたう寒きに、例の火をけかきいだき、あさぶすまひききつゝ打ちふしをるに、軒のひまゝ〳〵より吹きいるゝ風につれて、かしらの上に何にかあらむ、いとひやゝかに散りくるは、雪ふり出でたるに

すゞろに
したをれ
えもいはず
え…す

やとおもふほど、まどの戸に、さとふゞきかくるおとのいとはげしく、すゞろに心すごきよのさまなるに、なれにしすまひも、たへがたうおぼゆ。やう〳〵風しづまりて、したをれゆく竹のおとの、をり〳〵聞こゆるは、いかばかりつもるにかと、心もとなきに、まどの戸おしひらき見れば、有明の月さしいでゝ、のきばの山も、ふもとの野べも、ひとつにうづもれたる、くまなき光の、雪にはえて、えもいはずをかしきに、あはれみやこの人にとおもふもかひなくなむ。

三〇　夕

とほ山寺の入相のかね、ねぐらにかへるゆふがらすも、いつ

ものから
こゝろもとなき
引きはへ

しか聲しづまりて、むかへる文卷も、やう〳〵見えず成り行くに、心ゆくわたりは、いとくちをしきものから、しばし打ちおきて、はしの方にいづれば、くれのこれる梢どもの、ほのかなる山のはに、はつかにあらはれたる三日月の影こそ、いとをかしけれ。青さぎとかやいふ鳥の、あやしき聲になきゆくが、何となくものさびしげなるを、こむといひつる友、はたくれ過してやとおもふも、こゝろもとなきに、ともし火かゝげたるこそ、まづうれしけれ。

三一　瀧

たきは、いと高きいはほのかしらより、ぬの引きはへたらむ

なからばかり

やうに、はるかにおちくだれるが、なからばかりに、さし出でたるいはにあたりて、こなたかなたくだけちる水の、末はけぶりのやうに、打ちちりまがひたるいとをかし。水引のしらいと、はへてといひつべく、ほそやかに、ながうおちくるも、なつかしう見ゆるを、すゑたえ〳〵に、苦なめらかにて、いはほのみ、しめりたるは、あはれ心ゆくばかりもと、くちをしうおぼゆ。又くづれおつる雪とか、山もとゞろにて、いはほもさかのぼるやうに見えたるは、心すごく、ちかくもえよらず。瀧つぼなど、ひろくあをやかなるは、何となくおそろしくや。されど、水けぶりの風にふきやられて、とほき梢までなびきゆくに、日影かゞやきて、其のあたりに虹の立ちたるは、いとめづらかなり。庭のうちに、いはほたゝみて、よきほどに、せ

いはほたゝみて

きおとしたるが、水のおとにまぎれて、物語などの、はし〳〵きこえぬもをかし。柴をり入れて、ひゞきをとゞめたまひけむみあそびのをり、思ひやるもいとをかし。

三二　井

おもふどち
たうべまほし
くみてをとて

おもふどち、山里わたりをありくほど、水たうべまほしくて、しづがふせやに、立ちよりしに、ことさらに、くみてをとて、桶ひきさげつゝ、出でゆくが、いとうれしく、しりにたちてゆけば、すこしおるゝところの、杉の一むら、しげりたるかげに、いときよらなる水の、たゝへたるが、いはねをくゞりて、流れいづめる、あたりの草さへ、青やかにて、打ち見るをり、こゝろき

おるゝところ
いづめる

さながらのむ
さ…
あかでも人を
むすぶ手の雫に濁る山のゐのあかでも人にわかれぬるかな（古今集）

よくおぼゆるに、ちひさき龜の一つ二つ岩の上にゐたるが、おどろきがほにて、かくれ入りなどするもをかし。やがてをけさし入れて、くみあげたる、さながらのむこゝちの、いはんかたなきに、あかでも人をと、打ちずしたる、いとをかし。

三三　山家井

大正十一年度大分高商入學試驗問題

「いはもる水のほのかなるを竹のひもてすのこのもとにまかせやりつゝあやしき水ぶねにたゝへたるがよるひるとなくしたゝる音のいみじう心すみてうきよのちりもきようすゝぎはてぬるこゝちすおきふしやすきひとりずみには山の鳥どももいたうなれてあさゆふにこの水のほとりにおりきつゝはね打ちそゝぎなどするもまたなき友とおもひむつばれてなむ」

三四　池

ゆほびか

池は、ひろき庭に、水のこゝろ、ゆほびかにて、舟などもうかぶべく、ものしたるはさらなり、ほどなきつぼのうちなるも、入江のたゝずまひ、なぎさのけしきなど心しらひて、水とりなどすませたる、いみじうなぐさむわざなりけり。蓮はいふべくもあらず、何にまれ、水草はかならずうゝべし。今やうの、何とかやいふ土して、かたくぬりたるに、たて石こちたくものして、色あるうをあまたすませたるは、こゝろづきなく

こゝろづきなく

こそ見ゆれ。いとせばき所などは、これなくてあらばやとぞおぼゆる。野山のなかに、おのづからたゝへたる水、あをやかなる、またつゝみたかくつきて、田どころのまうけにしたるなどは、底深く、けおそろしうて、此のついでにはいふべくもあらず。

けおそろし　けぢかし

三五　湖上眺望

杉のしたみちおるゝ所より、ふとみえたるみづうみ、まづめおどろかれて、かばかりたかき山の上に、いかでかは、たゝへけむとおぼゆ。神にしませばなど打ちずしつゝ、關こえて、磯づたひの道をゆくほど、うちよする浪のおと、入江のたゝ

神にしませば　大君は神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも（萬葉集）

やきぬべく　ぬべし

ことうみ

大正六年度山口高商入學試驗問題

ずまひなど、あまもしほやきぬべく見ゆるを、行きかふ舟のひとつもなきぞ、なほことうみにはことなりける。箱根の御やしろにまうづとて、なほのぼり行くかたより、かへり見したるは、えもいはずをかしう、そこひもしらぬ青やかなる水の、山のひまゝ〳〵行きめぐりたるさま、なにがしの瀨戸おぼえて、いみじうこゝろすごきに、はれゆく雲の上より、いと白うはれたるふじのねの、水のおもて、さやかにうつりたるは、またたぐひなくこそ見ゆれ。

三六　漁邨

「あまのすみかばかりあはれなるものはなしいとたよりな

たよりよき
たまらぬ
かりそめ

きうみべの風もたまらぬ松かげなどにたゞかりそめにつくりたるわらやどものさま浪打ちよせなばやがてながれもうせぬべういとはかなげに見ゆるを繪にかきすさびたるなどはなか〳〵にをかしき物からさてすまひなば何ごゝちかせましと思ひやるだにこゝろぼそし」ゆふつかたなど年おいたるをのこの手がらみしたるがいそべに立ちてけふはいとおそくもあるかなどいひつゝ沖のかたをまぼりをりうまごどもにやあらむまさごの上をはしりありきつゝあそびゐたるに入日さしたる島かげよりみつふたつ歸りくる舟のかぢ引きをりてほこらしげなるを老人まちえがほに打ちほゝゑみたるはさちおほかりしにやと見ゆなぎさによせてとびおるゝまゝにつなくりよせなどと

うせぬべう
はかなげ
かきすさび
手すさび
をかしき物から
さて
手がらみ

まぼりをり

かぢ引きをりて
さち
さちはふ
さいはひ

のゝしる
大きなるこ
籠、笥
さはいへど
くゞつめくもの
めく、ぶる
こひもてゆく
もて
て

やう〳〵

すきかげ

おのがじゝ
こわだか
あまのさへづり

かくしつゝのゝしるに男も女もあまた出で來て大きなるこに魚ども取り入れつゝになひもて行くさまさはいへどにぎはゝしげなりくゞつめくものもてきてちひさき魚三つ四つこひもてゆくわらはなどもありすべて人多くたちこみさわぎて舟のあたりかしかましくさしよりてのぞくべうもあらずいとながきあみの渚にかけほしたるをくりためてとり入れなどやう〳〵しづまり行けばこなたかなた火ともしたるすきかげかべもあらはにていとあはれに見ゆひとよ宿りて見れば浪風のひゞき枕をゆすりてつゆまどろまれず曉がたとなりの家々めざましてなりはひの事どもなるべしあやしうきゝしらぬことゞもをおのがじゝこわだかにいひかはしたるげにあまのさへづりめづら

をかしうも

しうもをかしうも。

三七　驛

大正十一年度高等學校入學試驗問題

「をさまれる世はうまやぢの行きかひもにぎはゝしく人やどす家はたたてつゞけて草引きむすぶ思ひもなき物からさすがにうちとけてしもねられぬは旅ぢのならひなるべし」曉のかねはいづくも同じひゞきにていとゝく立ちいづるはたごの馬の聲々まくらがみにきこえてこゝちよげなるに今日はていけもよかなりなにがしの浦のながめいかにをかしからましかしこの御社にもこたびこそはなどいひつゝそゝぎおくるおとのほかにきこゆるはあなたにねたる旅人なるべし家なる人々もおきいでゝ朝げのことなどとかくまかなひありくほどやう〳〵物さわがしくなりて物になひゆく男どものひなうたうたふなど、いそがはしげにきこゆとばかりありて門のもとにひきよせつゝ馬まゐりてさぶらふといふはわがのるべきにやとおもふもいとをかし。

はたご

よかなり

そゝきおくる

まかなひ。

どばかり

三八　古寺

おほきやかえよむべくもあらぬえ…す

松風木だかく吹きわたりて、はる〳〵と、のぼりゆく道のをかしきに、おほきやかなる碑の、かたへに立てる、苔むして、えよむべくもあらぬは、此の寺のふるき故よし、しるしたるな

ふりにたり。（にけり）
さるかたのつとめ

るべし。例のからめきたる門の、きくちて、いたうふりにたれど、あたり〳〵、きよらかにかきはきたるは、さるかたのつとめには、さすがに心入れたるほども見ゆ。御堂にまうでて、犬ふせぎの、うちを見入るれば、いと大きなる佛の、ふるきかたしたるが、立ちたまへる、昔くだらよりわたし奉りしも、かゝる御さまにこそはと、おぼゆるに、めうがうのかうばしく、かをり出でたるも、いとたふとし。僧坊のかたへゆくに、かけひの水音、しづかにて、人のけはひもせず。かゝる所に、二日、三日こもりゐて、ふみなどよみたらんには、いかに心すみて、をかしからましとおぼゆ。鳥の聲々、谷深くきこえて、日影もやう〳〵かたぶくに、おもほえず、つき出でたる鐘の音の、山ふかくひゞきたる、所がらは、ましていとあはれになむ。

犬ふせぎ（猫入らず）
めうがう
けはひ
よみたらんには
かに……からまし
おもほえず（おもほゆ、おぼゆ、おもはる）

大正十五年度高等學校入學試驗問題
ねんじてへめぐる
および
いかで

三九　羈中幽情

「をのことあらむものゝ家にのみやはと心たけくおもひ立ちしも日かずふるまゝにいとこひしう今も立ちかへらまほしきこゝちするをしひてねんじてへめぐるにいつしか年月もかさなりぬ」さるは故郷にもちぎりし月日のちかづくにいつしかとおよびをりつゝまつらむをいかで其のほど過さずと心のうちにはいそがるゝものからこゝかしこにて何となくしたしくなれりし人々のいとねもごろにいふには心づよくもえものせずまた雨ふり風ふきしきる日などはおのづからもとゞまりておもひしよりは久しき旅

たゆたはるゝ

になりゆくにかく立ちいでしついでならではのこりの國
國もえゆきめぐらじふるき所にてもまたたづねむことは
かたくやとおもふにさすがにたゆたはるゝも心のなほ故
郷人ならではたれにかはとうちおぼえて
心のみむすぼゝれけりへだてなくかたらふ人のなびに
なければ
へだてきて心にうかぶおもかげもほのかになりぬふる
さとの空

かたのまよひ
あつらふる

あかづきしたもとかたのまよひなども人にあつらふるは
いかにしたしきも猶家にてのやうにはものしがたきもか
にかくに旅ばかりうきものはなかりけり

うしろで
えたふまじくや
え：す

四〇　岸頭待舟

いとよき折かなとて、いそぎくるに、岸さしはなちたるこそ
いみじうくちをしけれ。猶しばし〳〵今ひとりのせてよ
と、いふ〳〵走りくるもあるを、きかぬがほして、こぎゆくう
しろでは、いとにくきものから、さのみこぎかへしたらんに
は、えたふまじくやと、おもはるゝを、あなにくの船人や、いた
づらに、人をはしらせてと、はらあしげにいひたるこそ、心な
くは見ゆれ。かたへの石に、しりかけて見やれば、あしまと
ほく、さしわけゆくを、かなたの岸にもまちどほなるけしき
に、たゝずみたる人あり。みなかみより、さしくだす、いかだ

のさまの、いとしづかなるに、なかすのわたりには、ちひさき舟つなぎて、四手とかい、ふあみさしおろして、とかくするなど、いとをかしく、一日もかくて見まほしうおぼゆ。おくれたる人々、つぎ〳〵來あひて、立ちまつほど、やう〳〵こぎもて來たることとうれしけれ。

こぎもて來たる

四一　鷺

よしある

さぎは雨しづかなる入江の、よしあるすさきなどに、たてるはいふべくもあらず。くれゆくまゝに、こなたかなたの、あしかげよりたちて、打ちつれつゝ、ねにゆくさまもをかし。ゆふ日はれたる山ぎはなどに、飛びわたれるが、色さやかに見えたる、いとをかし。おほくやどれる梢をとほして見れば、雪のふりつみたるやうなるに、あるはたちつゝ、あらそひさわぎたる、ゆるぎのもりも、思ひやらるゝを、いつしかねしづまりて、おともなし。明けゆく空には、おのがじし、こなたかなた、とびわかれ行くけはひも、あはれなり。さぎすの池のふることは、おもひやるもいとかしこし。ほこくひもちてと、ふるき歌にもよめるは、力士まひとか、いひけむいにしへの、手ぶりもしのばれていとをかし。

ゆるぎのもり　いかなればゆるぎのもりの白鷺の今朝しもことに立ちさわぐらん（新千載集）ゆるぎの森は近江國にある

さぎすの池　古事記垂仁天皇の條に見える

ほこくひもちて　池神の力士まひかも白鷺のほこくひもちてとびわたるらん（萬葉集）

四二　櫃園記

むつき　十二ケ月の異名

ことしむつきの末つかた、みづからほぎて、そのの名つけむ

とて、生ひたてる木どもの中に、なに、かもよけむと、思ひめぐらすに、樞なんあるが中にも、めでたき木なりける。さるは此の木よ、たまちはふ神代より、ことなる故よしありて、ひもろ木まつるにも、まづ此の木をさしたて、かしこき御うけひにも、いみじきいさををあらはし、もゝたらず、いづかしとしも、たゝへきつゝ、あまがし、しらがしなど、たぐひさへ多く、又和名抄に、萬年木としるせるは、ことにふさはしき名にこそありけれ。かれ此の木をおむかしみて、樞園となんつけぬるも、身におはぬ名にやあらん。

としをへて、しげることばの、かひもなき、み山がくれの、五百枝くまがし

たまちはふ ちばやふる
ひもろ木 ちぎ、かつをぎ
うけひ うらなひ
もゝたらず
おむかしみて

四三　書齋記

おのれつねに山をこのむ。とほく行きては、ふじのねにのぼり、近く出でゝは、あそのねにあそぶ。雲霧をしぬぎ、いはねをふみ、しもとをわけ、松がねをよぢ、つかるれば、手束杖により、なづめば、草のまくらにふす。しかはあれども、雨につつみ、風にさはらひて、つねにしもえのぼらず。こゝに、わがふせいほぬちに山あり。名を、ふりぬるふみの山とたゝふ。上は、たかまのはらにそゝりたち、しもは、そこついはねにいたる。つくゑを、かけはしとして、こゝらの巻々をよぢ、つかるれば、つらづゑにより、なづめば、わきつきにねぶる。雨に

しもと 若木、鞭、策
手束杖
雨につゝみ 雨づゝみ
いほぬち やぬち
たゝふ
こゝらの巻
わきつき ひぢつき

つゝます、風にさはらず、とこしへにのぼりあそぶ。しかして、其のたかねより、はろ〳〵見さくれば、久方のあまつ神代より、うつそみの今のをつゝまで、雲霧のまよひなく、道の八十くま、くまもおちず、まさやかに見しあきらめられたり。かれ此の山ぞ天のしたのもろ〳〵の山の、君とある山、おやとある山、たか山のうましやま、みづ山のくはし山、あなたふと、あなおむかし。

今のをつゝ
くまもおちず
見しあきらめ
うましやま
みづやま
くはし山

四四　夜　學

大正四年度高等學校入學試驗問題

「寺々のそや鐘のひゞきもをさまりてみな人もねたるにいとうれしうとも火あかくしなしてふづくゑにうちむかひたるいみじう心すみてひる見たりしあたりのなに心なくて過ぎにしもおもひしられて深きこゝろばへあるくだりくだりもおのづからときえらるかしかゝげつくしてもなほねぶたきもしらずあぶらさしそへつゝ見もてゆくに遠き世の人もたゞさしむかひかたらふこゝちす」さうしつくりてをかしきふし〳〵あるはふと思ひえたる事などをばすみおしすりつゝかきつけなどするもをかしとりの聲は夜ふかきにやとおもふにいととく明けはなれたるしばしはとて打ちねぶるゆめのうちもあだしごとならんやは見もてゆく
さうし

四五　書

みち〳〵しきすぢ
何くれ
たてたるすぢ
えうあること
やがて（いまかへりこむ）
よしなしごと
ちりぼひ

夏の日のくれがたきをもしらず、冬の夜のながきをもおぼえぬは、書見るこゝろのたのしさになむありける。さるはみち〳〵しきすぢのはさらなり。家々に記せる何くれのふみ、又かりそめの筆すさびなど、からやまといにしへ今と、いとさま〴〵おほかる中に、わがたてたる筋ならぬも、見もて行くまゝには、えうあることゞももありて、かにかくにあかずおもしろくたのしきは、書にしくもの、またなかりけり。とほき世のを見るほどは、われも其の世にあるこゝちして、やがて其の人々を友となして、打ち語らふこゝちさへせらるゝを、われも筆とりて、よしなしことゞも書きつくるが、だま〳〵もちりぼひのこりて、後の世につたはらば、今のいにしへを見るが如く、後の人、はたわれを友とせむには、千とせの末にさへしる人あるこゝちして、いとをかしくなむおぼゆる。よろづの心やれるわざ、いとさはなれど、たゞひとりゐてあかずたのしきは、書の外に又何かはあらむ。あるが上にも、あらまほしきは書なりけりと、鈴屋翁のいはれたるは、げにさることにこそ。

あるが上にも
鈴屋翁

四六　畫

繪巻物
さうぞく（さうぞきたり）

いにしへのまことをつたふる事、書のみにはあらず。ふるき繪巻物などの、これかれのれるが、人のさうぞくをはじめて、家居、うつはものなど、其のかみさまの、いとよくしらるゝは、又文字の及ばざるところなりけり。しかはあれど、世に

さとび

うたて

おほかめる　……かるめり　……かんめり

手ぶり　都の手ぶり

いはゆる繪そらごとといふこと、なきにしもあらねば、いにしへの繪なりとて、ひたぶるには、よりがたきもあるべきを、そは、その樣によりて、よく見わくべきわざになむ有りける。かくて後の世の繪師ども、かの繪所などいへるあたりは、其の家のつたへありて古へのたゞしきあとにしたがひて、おほかたものすめれど、なべての世のは、たゞおのがむき〳〵、筆にまかせて書きなせるが、いたくさとびて、見るめも、いとうたていやしく、もてあそびがたきがおほかめるを、又やうやう近きころは、いにしへのみやびをしたひ、ふるき跡をたづねて、書きいづる人もいできたる。これはた何事もふるきに、かへり行く世の手ぶりなるべし。ちかきよの繪師、からのも、やまとのも、其のすぢいとおほく、其のふりさま〳〵

をかしく　おもしろく

見えしらがふめれど

かけても……ず

をぢなき

おふな〳〵

あらまほしきわざ　わざ

ふるきをたづねて

あたらしきを知る

（論語、爲政篇）

に、わかれたるが中には、筆のいきほひことに見えて、いとはなやかに、をかしくかきなしたる、いにしへにも、をさ〳〵はづべからぬが、見えしらがふめれど、猶そのこゝろばへは、いたうくだりて、ふるきには、かけても及ぶべからざるは、世の人の心の、はるかに隔たゝれるが故なるべし。今の世にして、いにしへの跡のみ、まもりたらむには、よろづにわたして、ひろくかきなしがたく、中々にをぢなきやうにも、見ゆべければ、其のおもむきにより、今にかなへて、さま〳〵心しらひ、すべきわざなめれど、それはたいにしへのたかき心をば、おふな〳〵うしなはぬやうに、あらまほしきわざにこそ有りけれ。ふるきをたづねて、あたらしきをしるといふから人のをしへは、よろづにわたして思ふべき事にやあらむ。

ゆはら
みまのみことの　古事記、天孫降臨の所參照
はじ弓
まかご矢
まかご弓
御とらしの　みとらしの、梓の弓の、なりはずの、音すなり云々（萬葉集）
たかとも
かつらぎのそつひこ　武内宿禰の男、神功皇后紀五年の條に見える

四七　弓

ゆみのつくりざまは、上つ代よりくさ〳〵ありけらし。ちはやぶる神代に、かしこき大神の、ゆはらふりおこしたまひ、みまのみことのみさきにたゝしゝ、二神のとりもたしけむ天のはじ弓などは、いかなるさまにかありけん。おもひやるもいとかしこし。まかごや、まかごゆみは、其得ものによりてなづけたりとか。御とらしの梓弓のなりはずとよみたるは、今其のさまは、しりがたきものから、おとのたかき、見るめのうるはしきによれりしならむ。たかともつくるわざのたえたるは、いともくちをしきわざにこそ。かつらぎ

的のすくね　的戸田宿禰、仁德天皇紀十二年の條に見える
物げなく　形語根＋げ
こよなき

のそつひこ、的（イクハ）のすくねのとりならしゝなど、みな丸木の弓にて、いとしもつよかりけむ。まゆみ・つきゆみ、しなはあれど、げに此の木こそ、弓にはよろしかりけれ。その丸木なるは、今もつくりて引きみるに、打ち見には物げなく、そこつよくしていにくけれど、ものをとほすことのこよなきは、いにしへのつよゆみおもひやらるかし。えぞがしま人の用ふるなど、いまも打ちけづりたるまゝなるは、いにしへの、のこれるにや。今のように、竹を合せてつくれるも、はやくよりぞありけらし。白木といへるもの、いと清らにうるはしきものから、たゝかひのにはなどには、さらに、もたらしがたかるべく、雨露をしのぐには、ぬりたるにしくことあらざるべし。よろづのもの、末の世になりては、見るめをのみかざりて、も

とのこゝろばへを、うしなへるおほかり。太刀・かたななど、ますらをのものたらむは、見るめをのちにして、用ひていさをあらむを、さきとすべきにこそ。

太刀、かたな

いさを（いさをし）

四八　物語文の論

源氏物語をとくこと、近世まではおしなべて、からぶみのふり、また佛ぶみのこゝろによりて、をしへのかたにのみとりなしゝを、鈴屋翁はじめていにしへの心をえて、ものゝあはれをしるべきために、かきたるものなり、といはれたるは、ことに其世のさまをしり、つくりぬしの深き心を、あらはしつくされたり、といふべし。さるはいにしへ學せむ人は此

ものゝあはれ

の心をもて見べき事は、今さらいふべくもあらねど、又大かたの世にして、やんごとなき人などの、これまなばむとにもあらで、人によませて、心やりに聞かむとおもひたまふもあり。わが仕ふる君のおほせごとにて、よましめたまはむには、いなびがたきわざなるを、さるをりは、又すこし心しらひして、其のくだりによりては、こゝは諷諭（サトシ）のさまにて、かきたるなりなどやうに、ときなしたらむもよろしかるべし。まことのこゝろばへならむからに、其の世のさまにのみ聞えたらむには、かへりていにしへを、うとみ給ふ心もいできぬべし。いにしへまなびのすぢにとほき人の心は、にはかには、おもむけがたきものなれば、やう〳〵に其の心の入りたつさまに、ものしたらむなむよかるべき。こはいにしへま

ものしたらむな。む。……べき。

なむ　ぞ　や　か（＋第四段形）

なびのほいにはあらねど、とほき神代にも、おもひかねの神といふまし〳〵て、おもひはかりし給ひし事もあなるを、まして人の世の今の心を、いにしへにみちびかむには、かならず其のすぢのおもひかねは、ありぬべくこそおぼゆれ。此のふみよみとかむにつけては、聞く人の心はたいにしへのみやびに、入りたゝざらむは、何のかひもなかるべし。いやしきことぐさに、其のむしろを見て、のりをとくべしといふこともあるにやあらむ。こは、ものがたりのみにはあらず。よろづの書をとく人、こゝろしらひなからずやはあらむ。から國の孔子のをしへも、ずゝむものをしぞけ、しぞくものをすゝめなど、其の人々によりて、おもむけられしさまなるを、たゞひとむきにのみ、こゝろ心得むは、かたくなりといふべくや。

おもひかね

しぞけ（ゐざり）
おもむけ
たゞひとむき
かたくな

四九　千世のしがらみの序

人のことばの花紅葉も一ひらの筆のにほひはちりぼひやすきものなればとてひとつにかきつめおしつらねられたる早崎ぬしのこれの心しらひよ其の花紅葉のにほひさへこふ心地せられていともめでたくおぼゆるを千とせの後まで家につたへてかどふ風にもさそふ水にもまかせざらんは其の名を千世のしがらみとこそいふべけれ

おしつらね（紙をおしたり）
早崎ぬし（土佐の人、名は益）
心しらひ
かどふ風（かどはかす）

しづ心なき

五〇　大濱某がおし花帖のはし書

とほき旅路を行きめぐるには、むかしも今も、道の日記とて、おのがじゝかき出づめれど、おほやけの事とりもちて、日をかぎりたるうまやぢの行きかひ、しづ心なきたびねのおきふしには、筆とりてものしるすべきいとまもなく、はた、つかれたるこゝちには、いともものうく、たれ〳〵もいたづらにのみ打ち過ぐるを、此の一折は、さまかはりて、其のゆきゝの所所、立ちより見られたるあたり〳〵にて、手すさびにつみとられたる木草どもなるを、花も葉も、たゞいさゝかなれど、かくおしつらねられたるを見れば、其の所々のさまの、目にうかび、心におぼえて、いとおもしろきに、此のぬしのこゝろは、いかばかりかはたのしからむ。かれ、この一折ぞ、いとまなき旅路の日記にかふべきものにて、いとみやびたるわざになむありける。天保十二年の春のなかばにしるす。

ぞ……ものにて
やぞかなん　十體言

五一　大津繪帖の跋

見せずては
筆すさび
これはた。
また

よろづの物、ことわりの外におもむきあり。其おもむきは、其のしれらむ人に見せずては、何のかひかはあるべき。此の大津繪は、むかしよりのならひにて、童の筆すさびのやうに、はかなく書きなしたる中に、大かたの繪師の、まねびがたきおもむきある、これはた見る人によりて、其のおもむきは

しらるべきなり。色をも香をもしる人ぞしる。と昔の人のよみたるはげにさる事になむ有ける。

色をも香をも
君ならでたれにか見せむ梅の花色をもかをも知る人ぞしる（古今集）

やには

かげとも
そとも
とりよろはぬ
具足

五二　蓬萊石記

石あり島山の形なせり人すむべきやにはあり田つくるべきくぼありうしかふべき原あり馬つなぐべき野あり松さかゆべき峯あり杉しげるべき谷あり水わくべきほらあり瀧おつべき岩ありまた網ひくべき浦つりたるべき岸舟よすべきいそありかくて花をめづべき岡月を見るべきさきさへぞあるかげともそともこなたかなたすべてとりよろはぬ所なくたりそなはらぬくまもなしこれぞ此の龜のそびらにおへるてふなにがしの山ともいひつべきさまなるかくとりよろひたりそなはれる石のおほきさはたゞひときばかりなればたなうらにすゑてめづるにあへたりかれこの石をからの錦のふくろに入れて朝よひいなだきにさげもちめでよろこびつゝおほやけにつかふるまもふところにし旅ゆくに身をはなたずたふとみおむかしむ人はわが肥のみちのしりくまもとのさとなるこもまくら高岡のなにがしかのなにがしの山にすむてふ仙人にあえたる翁なり

ひとき

たなうら
あへたり
いなだき

おむかしむ

五三　荻のまがきのことば

かきかぞへたる七くさ
萬葉卷八、七種の花の旋頭歌

ながきよのまどのもとには
歐陽子方レ夜讀レ書…予謂ニ童子一此何聲也、汝出視レ之…（古文眞寶秋聲賦）

かきかぞへたる七くさには、もれにたれど、なほをぎばかり、あはれなるものはなかりけり。やう〳〵しげく成り行くころほひより、あさゆふ露もすゞしげに打ちなびきつゝ、いつしかと、秋たつ風におとたてゝ、人まつゆふべは、それかとのみおぼめかれ、ながきよのまどのもとには、文づくゑのねぶりをおどろかしなど、から國のなにがしが、わらはべに、ことゝひけむさまも、おもひ出でらるかし。いとたかうほに出でたるが、月影にひかりあひたるはさらなり、しぐれうちして、やう〳〵、うらがれ行くけはひも、こと草には似ず、あはれふかくなむ。しのざき氏の園に、一もとうゑおかれたるが、今はいとしげくなりぬるを、おのれしばし、此の家にやどりて、明けくれ、きゝなれにたる風のおとの、今も身にしみておぼゆるに、此のごろ、其の家の名つけてよとあるに、さらにことゞしくやはとて、をぎのまがきとぞものしつる。

五四　心の山里の詞

爲一ぬし
川崎氏、大阪の人、廣足門人

いはほの中、もとめけむむかしの人は、世のうき時の事なりけらし。かくばかりのどかなる御世にあひては、なほ市中のよろづたよりよきところのすみかこそ、あらまほしけれ。しかして常の心を、水草清き山のおくに、すましめて、世のちりをはらひはてたらんなん、いともすゞしかるべき。こたび爲一ぬしの、かくれすまるゝ家、これにかなひて、をかしくおぼゆるを、其の名をいかに、つけてんといはるゝに、やがて

心の山里と、いふべくやとぞこたへける。

ゐながらに、すます心の、山水は、にごる世もなし、あする世もなし

五五　川づらの宿の詞

川づら

水はしらせ　四（ナヘン、ラヘン）I＋す　其の他I＋さす

高野氏　長崎人、名興善　廣足門人

ひだ人の、ほめてつくれる、にひむろに、瀧おとし、水はしらせなど、庭のさまをつくろふも、いにしへより、さま〳〵なりけらし。しかはあれど、市なかのすまひには、たきおとすばかりの水は、たはやすくも、せき入れがたく、池はた、おのづからならぬは、心ゆきても見えざめり。高野氏の、此のにひむろは、大川の川岸に、つくりいだされて、水の中より柱たてたれば、川のながれ、やがて庭のやり水となれり。さるは名におふ、玉のうらより、よるひる、さしひくしほたえずして、海の魚ども、おのづからのぼり來つゝ、おばしまのもとに、をどりあそべれば、居ながらにして、釣のいとをも、たれつべし。こぎかよふ、をぶねのおとは、ねざめのまくら、さやかにひゞき、大橋の上のゆきかひは、朝ゆふの、心なぐさと成りぬ。家のうちの、心しらひは、すきこのめるすぢにて、さるかたのまうけ、おつることなく、もとつ家よりかよふ道はた、石なみをかしくものして、小松どもうゑつゞけられたり。あるじは、もとより、みやびごとこのまれて、友まじらひあつくひろく、春の花は、川かみとほき、かすみのうちに見はやし、秋の月は、眉山にまち出でて、清きながれに、影をすまし、夏のゆふべは、浪ふ

名におふ　名にしおふ

玉の浦　長崎灣

たれつべし

心しらひ

石なみ

く風をみにしめて、郭公をまち、冬のあしたは、窓を開きて、三山の雪をめで、木の芽を煮て、まらうどを、もてはやさるゝは、またたぐひなき、あるじになむある。かれおのれがひとことをと、こはるゝに、やがて見きくまゝをしるして、此家の詞とはなしぬ。天保の八とせ、かみなつき、つごもりの日。

つごもり

倭建御子　此の歌、古事記中巻、景行天皇の條に見えてゐる

年さむくしてのち　歳寒然後知ニ松柏之後凋一也（論語、第九）

つひにもみぢぬ　雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ（古今集）

五六　長松の二字に、かき添ふる詞

むかし倭建御子の、きぬきせましを、太刀はけましをと、歌ひたまへる、ひともとの松は、いかばかりのおほ木なりけむ。年さむくしてのちに、しぼむにおくるゝをしるといひ、つひにもみぢぬ松も見えけれなど、いみじきみさをたゝへ來つつ、からにも、やまとにも、めでたき木とするはげにさることになむ。春のみどりは、一しほさらなり、夏の木かげのゆふすゞみ、秋のよながき風の音、雪ふりつもれる冬のながめなど、さらにいひつくすべくもあらず。かれ此の木のみさをにあえて、ちとせのよはひをともなへるは、やがて長松庵のあるじ、すなはち此二字をかきて、一ことそへよとあるまに〳〵かくなむ。

めでたき木とするは　Ⅲ十なり

あえて

五七　本居大平に贈る

春の山風、なほ袖さむきころほひ、たひらかにおはしますらんこそうれしけれ。千里の外までかくれなき君の御名は、

しのびはべる　忍、慕、耐
ゆかしう　なつかし
たはやすく
めざましく
やさしく　優、耻
思ひたまへらるゝ　たまはる、たまへらる
なにかあやなく　あやなし

風のおとにつけつゝ、はる〳〵と、うけたまはりしのびはべるにも、常にみあたりのみゆかしう、とし月おもひわたり侍るものから、たはやすく行きかひがたき海山の長路に、えこそおもひたちはべらねば。かく聞えさするも、名をだにしらせ給はぬに、いかにうちつけにさし過いたるわざやと、めざましくもやおもほすらんと、かつはやさしく思ひたまへらるゝものから、同じながれを、かたへにても、くみ侍る心には、なにかあやなくなどおもひなされて、えしも忍びあへ侍らずなん。さるは高きよをあふぎ、いにしへをしのぶ人々、いまは四方の國々に、其の名多く聞えはべるを、すべて故鈴屋翁のをしへによらざるなんあらざりける。君翁の學の道をつぎ給ひて、もはら其の御あとによりて、古へを考へ給ふ

いかで　いかでか
春臣　中島廣足の前名
たど〳〵しう
芳宜園　橘千蔭
縣居大人　賀茂眞淵
いとまのひま

と、うけたまはるにも、いかで御まのあたりに、よろづ聞えうけたまはらまほしうこそ侍れ。春臣、いまだよはひわかく侍りて、よろづ、いとたど〳〵しう、いさゝかわきまふるかたも侍らねど、たゞ故翁の御あとのみ、ゆかしうて、あらはしおき給へる書どもを見つゝ、いにしへのことをば、やう〳〵あきらめ侍り。さるは先つとし、おほやけの事によりて、大江門に二たび、三たび行きかひて、おほよそかしこに、七年あまりも、たびゐし侍りつるほど、歌のまなびをば、故芳宜園の後なる一柳千古ぬしにつきて、縣居大人の歌のをしへを、かつ〳〵聞きそめ侍りてより、いよゝいにしへのこと、ゆかしうなりぬれど、其のかみことしげくて、さらにいとまのひま侍らざりしかば、こゝろのうちにのみなん思ひ過ごし侍りけ

る。かくて此の五とせさきに重き病にかゝりて、つかへをしぞき、いとまある身となりぬるより、もはらいにしへのこゝとをのみまなび侍り。かのゆきかひつるほど、京にも三たびばかり、まうのぼりしかど、おほやけわたくし、いそがはしきにまぎれ、いにしへまなぶ人々の名をだに、聞きさだめずはべりき。今は都にもぬでのやとかいふありて、君にもをり〳〵のぼり給ひ、書どもときしめしたまへば、御をしへをうくる人ども、いとさはになりぬるよし、長瀬眞幸よりつたへきゝ侍るにも、あはれ行きかひつるむかしならましかば、其の御學のやをもとぶらひ、御ときごとをもうけたまはり侍らましものをと、いとなんくちをしうおもひ給ふる。此の國にも近きとしは、古學さかりにおこなはれて、長瀬眞幸

ぬでのや　鐸屋、城戸千楯、宣長門人

長瀬眞幸

ましかば……

……ましものを

やまひも……

おこたりて

あからさま

たいめたまはり

とはずがたり

なめしく

おもうたまへらるゝ

えしも……ねば

も、いといたうよろこぼひ、書どもおこたらず講ぜらるれば、人々はたきそひつゝなん學び侍る。春臣がやまひも、今はまたくおこたりて侍れば、近き年の中には、たび衣おもひたちて、かならず其の御あたりをば、とひまつるべし。其のをりは、あからさまにても、たいめたまはりてよ。おのが身の、とはずがたり、くだ〳〵しう聞えさするは、いとなめしく、をこがましきわざに、おもう給へらるゝ物から、其の御あたりにかへる人の、よきついで侍れば、數ならぬ名をだに、かねて御耳にふれおかまほしうてなん。つたなき筆には、えしも書きつゞけ侍らねば、御らんぜんもうるさくやと、よろづはとゞめ侍りぬ。なめしきつみは、かへす〳〵ゆるしたまひてよ。あなかしこ。

九月
文政三年
岡べの庵
熊本の北、烏崎村の閑居

そがひ

五八　秋のやまぶみ

九月のはじめつかた、岡べの庵にすみわびて、そこはかとなく、あこがれいでぬ。門田の稻の、色こき中をわけ行く程、いなごまろ・はた〳〵などいふ虫の、たもとにとびうつるも、まづをかし。花薄の招くをしるべに、そがひの山より、分けのぼる木々の下葉、やゝ色づきにたり。さらしばのあたりを過ぐとて、

紅の、かげ見る水に、白妙の、布さらすなり、島さきの里

谷より吹き上る風に、松の露さへちりかゝりて、いとはだ寒く、このもかのもの梢に、もずのうちなきたるなど、つねにめ

なれぬる山の、たゝずまひも心とまりて、おぼゆるは、秋のさがなめり。此のわたりは、折にふれて、行き通ふ道なれば、さしもめづらしげもなき物から、伴なふ人もなければ、心なぐさに何くれの事をも、書きつけんとす。腰なる筆、ふところなるかみをぞ、いみじき友とはたのみける。いさゝかのぼりたる道の、かたはらに大きなる石の、わりすてたるふたつあなり。こはむかし加藤清正ぬし、此の熊本の大城をつかるゝとて、多くのいはほを、わらしめける時に、此の巖をもわりくだかむとせしかば、上なる山よりいと大きなる石落ち來りて、其の石だくみらを、ことごとにうち殺しぬとなん。さるによりて、此の石をわることをば、やめにけり。そは女男の石にてありけるを、其の女石をわりしかば、男石怒りて

しか人をばうちころしぬとなん、語り傳ふる。其の男いしといふも、谷のかたに落ち止りて、今も此の道より十丈餘り左にあなる。大きさはよきほどなる、民の家ばかりにて、木の間よりいとくろうて見ゆ。かまとぎの坂は、いとさかし。菊をみなへし、ふぢばかまなどさかりなる、朝ぎりのなごり、おぼえて露ふかし。

かまとぎの坂　城西の峻坂

八千種の、花の下露、おちそひて、虫の音くゝる、秋の山みづすゝきのなびくが、末遠く白う見ゆ。

めづらしみ、秋の山ぢを、とめくれば、初を花こそ、うちまねきけれ

たけ村のあたりは、杉の下露、ひやゝかなり。わかれぢより左は、金の峯の宮に、まうづる道なり。又岩戸山のふもとを

金の峯の宮　金峯山

岩戸山　靈岩洞のある所

下りて、川内の浦にいづるもこれなり。右はわが今行く方にて、たけ村をすぎ、野井手の坂をこえ、小天の里にいづる道也。此の村なる宮脇正雄がり、立ちよりて休らふ。あるじへいじもていでゝ酒すゝむ。昨日河内の浦にて、あされりとて、魚のあぶりたるなど、さかなにせり。山里にはめづらかなり。たゞふたりのみかはすほどに、いたくゐひぬ。このぞの神無月には、此の山ぢにて、笠やどりせしことなど、思ひいでゝ、

川内

小天　島原海の東沿岸　蜜柑の名所

へいじ

むら雨に、かつがぬけふの、袖もなほ、そぼちにけりな木々の下露

みやまぢの、つゆにしぐれに、いくたびか、たもとぬらして、君をとふらん

西の海
島原海灣
うつゆふ

ゆふ日影のさし入るに驚かれて出でぬ。岩間の水も、音すみて、わが岡べよりも心清くおぼゆ。野井手の坂をこゆれば、西の海見ゆ。

かた山の、うつゆふなしゝ、わが心、見ひろめにけり、遠つ海

ばら

七まがりといふ坂の、いとさかしきをくだる。橘はまだ青く見ゆ。此の海への山々は、みなたちばなを、うゑおほしたる。神無月ばかり色づきぬれば、山々にてりかはして、めもあやなり。かく橘の多きは、ことくにに、をさをさあるまじう、いとめづらかなる所也。夕づけ行くまゝに、浦わより吹きのぼるしほ風、いといとう寒し。

わたの原、しほ吹きみだす、秋風の、あとこそみゆれ、沖つ八

伊倉の里
玉名郡、菊池川口に近い所
おのがおほば君
曾我氏、ナヲ

重なみ

伊倉の里さまでと、おもひしかど、日くれぬれば、やがて橘の里なる、來照寺に宿りぬ。あるじの僧は、おのがおほば君の、ゆかりなれば、所につけたるあへなどなさけあり。此の里は、家ゐも多ければ、あまのさへづり、にぎはゝしうきこゆ。

浦人の、やすき身にしも、ならひなば、よをしもそむく、こゝろなからん

こぞの冬も、こゝにやどりて、

さよふかき、枕にたづの、聲すなり、たびねのとこに、しほやみつらん

とよみつるを思ひいでゝ、たゞひとりふしたるあかつき、雁なきてわたる。

湯泉の峯
肥前の雲泉嶽

うらづたひ、とめてやきつる、わがかどに、夕あさりせし、天つかりがね

風さむき、うらわのあしを、かたじきの、衣かりがね、鳴きわたるなり

夜もあけぬれど、いそぐべき事もなし。はしにいでゝ、海の方を見やれば、朝日のかげ、湯泉(イデユ)の峯にうつろひて、はれ行くきりのひまに、舟どもの行きかふ樣いとをかし。帆あげたるさへ、このもかのもより、いでくめり。

朝しほの、とゞみに見れば、わたの原、風も千舟の、まほにみちたる

晝つ方より立ち出でぬ。磯山をこえ行く程、小田も、あはふも、色こくて、海よりあなたは、肥前の山ども殘りなく見えて、いはん方なし。多良嶽といふが、北の方にあなる、溫泉嶽につゞきて、高き山なり。坂をくだりて、小田の丸池の小橋をわたる。此の池は魚捕る事を止められたれば、大なる小きい〜と多くひれふりあそぶも、心やすげなり。竹ざき通り、といふより、野邊田村を過ぎて、伊倉の里にいたる。此の里は古へ、から舟泊りたりし所にて、其のあとども、こゝかしこに殘れり。さし出でたる岡を、丹倍(ニベ)の津といふ。唐人町といふもあなり。又、唐人のおくつきとて、考濱沂郭公墓と彫りたる石建ちたる。いと大きなるあり。元和己未年云々とあなるは、此の國の年號(トシノナ)なめり。そは皇明とあなる、かの國、明の代には、さる年號なし。されど海澄縣、三都男云々立、とあなるは、猶かしこの人の、しわざなるべし。今から人の末な

り、といふ民ども、こゝかしこにすめり。今は海にも一里ばかりもほどありて、にひばりの田どころおほくなれり。八幡の宮にまうでゝ、

にひばり

神がきや、あはれいくらの世をかへし、もりのほこ杉、こけむしにけり

比奈具
葦北郡、温泉地
日奈久

はふり東某がり、立ちよりつるに、あるじは比奈具の里なるいでゆあみに物して、家にあらず。其の母一人あなるが、猶しばしはかへらずといふ。いとほいなければ、立ちいづとて、

いたづらに、あさりしてこそ、かへりけれ、君をとひこし、ひまもなぎさに

いかゞはせんとおもふに、高瀬の里は一里餘りにて、しれる人、はたあなれば、そをとむらはんとぞ、思ひなりぬる。行き

高瀬の里
高瀬町・玉名郡
菊池川沿岸

行きて大川のわたりを渡る。八日町といふに、しれる人のもとにいたれば、よろこびて、あるじす。猶近きわたりの、しれるかぎり來つどひて、何くれの物語するほど、あるじ心しらひして、あみ(網罟)入れ入たる舟に、くさ〳〵設けて、そゝのかし出づ(中略)。此の町をいでゝ小川有り。橋を渡りて西にはねぎの里、八幡の宮にまうづ。此の里には、かぬち(鍛冶)あまたすめり。音かしましうきこゆ。こゝより大路二すぢにわかる。山にそひて行く道と、海べを傳ひて行く道となり。其の海べの方へをれて行くに、かのあま女、猶此の道よりも多く來る。一里ばかりゆけば、腹赤(ハラガ)村なり。いにしへ腹赤の魚、貢奉(ミツギマツ)りけるは、やがて此の里なりけり。其のためしにならひて、吾が先君先つとし、貢奉りたまひしかば

みかど(朝廷)にも、いみじうめでさせ玉ひぬとなん。

いかで猶、今もたえせず、年のはに、はらかの魚を、みつぎてしがな

清源寺村といふは、いとゆほびかなる浦わにて、もしほやく所なり。けぶり一うらに立ちみちたり。さてしほじり、といふ古言(フルゴト)のあなるにつきて、よきついでなれば、しほやくさまを、くはしく見もし、とひもしつるを、まづゆほびかなる所に、砂をかきちらして、其の砂に潮水(シホ)をくみて、うちそゝぐ事、あまたゝびなり。しかして日にかわかし、よくひたるをば、またかきあつめて、竈の如くつくりたる、コミといふ物につみ入れて、其の上に猶潮水をそゝぎかくるに、はじめ砂にしみつきたるしほも、ともにとけながれて、下のかた横なるあ

ゆほびか

しほじり

なより、したゝり出づ。色青くて味ひいとからし。いにしへの歌に、しほたるといへるは是れ也。

さて箱の如く、板してつくりたる物を、ほりすゑおきて、其のしほをうけたむるなり。箱にみちぬれば、桶もて溜(タル)といふ物にくみいる。そは土をひろく、深くほりて、しろき土してぬりたるなり。上にはとまやふきたり。さてしほをやくには、其の溜なるを、さらにくみて釜にいる。釜のさまは、たらひにわりたる石を、ひろく並べて、釜の底とし、其のひまを白き土してぬり、上のかたに、横さまに木をわたして、其の木よりかねのかぎを、さしおろして、釜の石をあまた所釣りたり。そはくづれざらしめんがためなり。さて其の中に潮(シ)水(ホ)をくみいれて、下よりたゝ、たきにたけば、青き水こりて白

信景
天野信景
玉がつま

き鹽となるをかきよせて、かたはらなる竹籠に入れ、其の下に又したゝる水を、うけたむる、こをば俗ににがりといふ。薪は大かた松なるを、此の浦にては今は多く、石炭を用ふ。しほのしな、松もてやきたるには、おとれりとぞ。

さてかのはじめ、コミに入れたる砂は、しほのけ(氣)さりぬればかき出だして、かたはらにつみ置く也。是かの鹽尻といふ物にて、ふじ(富士)のかたによく以たり。筑前のうみべにては、今もやがて鹽じりとぞいふなる。先つとしかしこにいたりしをり、おいたる海人に、此の事とひつるを、しほをとりたる砂なれば、鹽後(シホジリ)といふ心ばへ也といへりき。かの信景がいへる事をひきて、玉がつまにあげつらへるも、是なるべし。今此の浦にては、さる名をばしらずとなん、こたへける。又古歌にも、しほたるとよめるは、此の國などにはなき事也。そは藻をかりあつめて、それに潮を汲みかけて、日に乾たるを、簀の上につみおきて、さらに潮をくみかけてたるゝ故にいへり。鹽木のかはりに、藻をたくにはあらずと加茂翁のいはれたるが如くなるべし。すべて、鹽をやくわざは、いとまなくくるしげに見ゆ。

加茂翁
賀茂眞淵

世の中を、からしとなにか、おもひけん、もしほやくなる、海人もありけり

などいひつゝ過行く。

ひだりのかたに、家のあまた見ゆるは、沖の洲村といふ。女石(イシ)の宮はるかに見ゆ。此の宮はむかし景行天皇(スホタラシヒコオシロワケノスメラミコト)

こゝにやすらはせ給ひつる石を、やがてみたまとして、まつ

れりといふ。にひばり(新治)のつゝみの、いと長きをつたひ行くほど、民どもあまたあつまりて、高き所をけづり、みじかき所に土をおきなどして、其の上にうみべより、白き貝の殼の、くだけたるを、もてきたりてしきちらす。こは近きほどに、君の此のあたり、御らんじたまふべき、あらましなれば、かくはものすなりとぞ。玉をもしかまほしげにて、いそしみあへり。

長洲はあまの苫屋、多くたちつゞきたり。こゝにもしほやく家多し。げに長洲・腹赤(ハラカ)は、うらつゞきなりけり。此の浦は島原あたりへ行きかよふ、舟の泊りなれば、賑はゝしき所なり。四王子宮は、景行天皇の御子、四柱を祭れりと申す。此のみかどの御子は、八十柱ましませりしよし、史(フミ)に見えたるを、こゝにまつれるは、いづれの御子ならん、さだかならず。

島原
島原半島にある

さて此所には蛇(ヘミ)すまず。宮の中の砂をまきちらしおけば、いづくにても蛇出づることなしとぞいふなる。町のはづれよりは松原長くつゞきて、すまあかしのわたりおぼゆ。こゝをさらし(晒)の浦といふ。

沖つ風、吹にけらしな、松がねを、さらしの浦の、夕波の音

松蔭におりゐてやすらふ。舟多く行きかふ。島原は舟ぢ七里也といへど、三里ばかりやあらんと見ゆ。手水村・倉滿村・壹部村・增長村など過ぎ行く。大島は蜑のすむ里なり。筑後の境に近ければ、關すゑられたり。其の關守には、熊本より年を限りて、物すめり。左も小道より、うみべに出づれば、虛空藏山といふに、神のみやしろあなり。いとあやしく

きゝも及ばぬ御名なるは、例の法師らが、しわざにやあらん。

肥前長崎のかた、日見の嶽などいふも、はるかに見ゆ。

みつあひの、綱打ちはへて、吾が里に、引きもて行かん、これ

のうみ山

山のなかばより、かなたは、筑後の國也。岩が崎といふは、い

そべの岩むら、海の中までさし出でたるが、波にけづられて、

をかしきあやどもある所也。こゝかしこ見めぐりて歸る。

日もくれぬべければ、十七八丁こなたに、荒尾村といふある、

そこなる宮崎某は、吾が母君のゆかりなれば、尋ね行きて宿

をかりぬ。あるじの翁いたうよろこびて、またの日歸らん

とするをも、しひてとゞめつ。さて翁あないして、筑後の國

の境をも見めぐりなんといふ。さらでも見まほしきあた

吾が母君
宮川氏、トラ

りなれば、いとうれしくて、ともなひ出づ。

宮内村といふより、北をさして萬田山をこゆ。うす坂とい

ふをくだり、下出村に出でて、山のかたはらを傳ひ、出川とい

ふにいたる。さゞれ白く水清ければ、そこなる魚どもいと

よく見ゆ。三宮八幡、萩尾村より、筑後國三池郡なり。谷を

のぼれば、市井野峠茶屋あり。高瀬より三池への大路也。

其の大路を少し下りて、右なる細道を傳ひて、今山村といふ

に至る。此の村は馬のよろしきが出づるよし也。うしろ

なる山を三池山といふ。いと高き山なるを、やゝ上れば紹

運寺といふあなり。こは三池の先君の、世々の祖のおくつ

きあなる山なりとぞ。其の山の上に佛するゐたり。いとさ

かしければ、あないの翁は、中々におくれぬ。登りはてゝ四

方を見渡すに、つくしの國原はさら也、柳川の大城なども、いとよく見ゆ。翁かたりけらく、此の柳川の海は、すべて泥海（ヒヂノウミ）にて、つねに濁れり。汐の干さかりたる折も、あやまりて其の泥に落ち入る時は、底深く沈みいりて、いたづらになるなり。又其の泥海にエッといふ魚すめり。かたちさゝ葉の如く、大きなるは二三尺もありて、こと海にはたえてなき物也。むかし弘法大師といへる僧、こゝにおはしまして、里人にむかひて、のたまひけらくは、此の地（トコロ）すべて沼多くして、田（タド）地少なければ、産業（ナリハヒ）に、乏しかるべし、吾れすなどりの幸を得しめて、世をやすくわたらしめんとて、海中にさゝ葉を、こきちらし給ひしかば、やがて魚となりぬ。さてこそ海人の業（アマナリハヒ）も、ともしからざるなれ。今のエッてふ魚、是なりとぞ語る。

三池の町

筑後國にある

げに神代には、御髭をちらし給ひしためし、なきにしもあらねば、古き傳へもまじれらんを、空海がしわざなりといへるぞ、例の佛尊ぶ主のならひにて、くちをしきかたりぐさかなと、ひとり心にうちなげかれぬ。

三池の町は、たゞ此の麓に見ゆ。此の地名（トコロナ）は、もと御木（ミケ）にて、いにしへ九百七十丈の大樹（オホキ）ありしより、名におひたること、書紀（ヤマトフミ）に見えて、和名抄にも三毛郡とあり。さるをいつの頃よりか、ミイケと韻を引きてとなへ來りけん。さるよりして、文字をさへに、三池とは書けるなるべし。しか誤りたるのみならず、三池の文字につきて、又いかなる人の作り出でけん、かの三池山といふ山の頂に、三の池あるによりて、山の名よりして、此の郡の名にも負ひぬるよし、語り傳ふるは、例

春平
岡部春平

のさかしらわざなりけり。〔頭書、此ノ三池ノ事ハ故アルヨシ、春平イヘリ。則チ三池氏ノ家記ニアリトゾ。サラバ猶考フベシ〕かの山の上にも、眞に池のかたは有りて、水はなきよし、のぼり見たる人の語りつる。そはたま〳〵に、窪き所をみいでゝ、しひて池のあとゝは、いひなしゝなるべし。後のよには、さるつくりごとすなるいと多し。吾が肥後の菊池郡をも、菊の池といふ有りしより、名におへりなどいふめれど、こは和名抄に、久々知とありて、菊は久々に、通はし用ひたる字のみなり。神の御名に、くゝりひめと申すを、菊里姫と書き、上總ノ國ノ郷ノ名、久々萬を、菊麻と書けるなど、同じためしなり。こはあげつらひめきたれど、筆の序に書きつく。

〔頭註―萬十五、豐前國白水郎歌一首、とよくにの、きくの池な

る、ひしのうれを、つむとやいもが、みそでぬれけむ〕山をくだり、平野の小屋といふにやすらひて、物などくふ。

翁またあないして、平野山なる石炭を、やく所にいたり見るに、山のかひに、あまた所、石をつみたてゝぞやくなる。火はさかりにもえて、一山のうち、松も小草もくろうこがれたり。やくひと、はたかほよりはじめて、手あしみな、ふすぼりて、だゞ目のみ、しろう見ゆる。人のさまともおもはれず。ほりつるまゝの石をば、ガラといひ、一たびやきたるをば、トヂといふ。此のトヂといふをぞ、里々にはうり出だすめる。さて穴に至り見れば、高さ六尺ばかり、横四尺ばかり、谷のうちを、横ざまにほりぬきたり。崩れぬべき所をば、大きなる木を、立てさゝへたり。翁があないにて、やゝ入りて見る。穴

はまがりて、おくのかたに、あぶら火ともしたり。石をほりくづす所までは、猶一丁ばかりもありて、あぶら火をもあまたともしたりとぞ。奥より石をになひて、はしり出づる男、やゝ妨げなせそ、かたへによりてよ、といひつゝ、あらゝかに、おしのけて出でくるが、いとわづらはしければ、かへりいでぬ。翁は猶おくまでもといへど、かしらのうへなる石ども、今も落ちかゝりぬべく見えて、いとおそろしきに、えいらぬを、いみじく笑ふ。されどおもへば、やくなき見物にぞ有りける。穴の口には、板戸たてゝ、夜はくぎをしも、さすめるとか。右のかたにも、同じさまなる穴あり。こは石をとりつくしたる、むなし穴なりとぞ。さてかたへに小屋ありて、其のことどもおきてさだむる人、三たり、四たりいりをり。かのになひ出づる男を、一たび二たびと數へて、物にしるす。其の數によりて、一日のやとひしろの、ぜに(錢)とらすめり。さてこそかの男どもは、おのがじゝ、かずの多からん事をほりして、しか爭ひつゝ、出で入るなれ。すべて此の穴に入るをのこ共は、身をもすてたるあらをにて、折にふれては、上なる岩くづれて、おしうたれ死ぬることもあめれど、こりずまに、かくやとはれくとか。そは、ぜにてふ物のほしき故なるべし。さることきくにつけては、いよゝおそろしうて、かしこくもおくふかく、いらざりけり、と翁が心なきをにくみおもふ。さてこゝにては、穴てふことをいみて、マブとぞいふなる。もしわすれても、あなといへば、いみじくはらだつとぞ。かく石ずみをほり出だす山は、こゝより一里餘り西な

る、戸岡山といふにもあなりとなん。かのさどの島あたりにて、金ほりいだす様を、つたへ聞きつるも、大かた是に似たるなり。かしこにても、穴をば、マブといふとぞ。かくてもとの大路にいで、またしも谷をくだり、いさゝか道をかへて、藤田山通、萬田村、境崎村などをすぎて、かへりつきぬる程は日くれにけり。其の夜は、かの山よりとり來つる、松茸をあつ物にしてくらふ。味いとよろし。よあけぬれば、猶とゞむれど、さのみはとて出でぬ。翁しばしおくり來て別れぬ。野原八幡をがみて、松山をこえ行くほど、こゝにも民ども集まりて、つゝみつき居たり。金山村をすぎて、大路に出づ。こはかの市井野峠より、高瀬にいたる道なり。二里ばかり行きて、築地村に至る。こゝはおのが遠津祖より、しれる(知行)所なれば、里人どもいできて、酒すゝめなど、よろづおろそかならず。今しも田苅るをりなれば、長ゐせんも、心なく覺えて立ち出でぬ。

延喜式
續後紀
續日本後紀

左に十町餘りいりて、立願寺村、疋野社あり。延喜式に、肥後國玉名郡疋野神社とある是なり。續後紀には、疋石神と書けり。今はひきしのとぞ唱ふなる。いと古きみやしろにて、久しくあれたりしを、吾が先君あらため造らしめて、みとしろ五十石を奉り給ひぬ。わが肥後國にては、式に入れる社は、阿蘇の大宮と、こゝとなりけり。ほどなく高瀬の里にかへりて、かの舟君の家にいたり、先の日のよろこびもいひてやすらふ。さてきけば、けふ此の川に人流れぬめり。さるはこゝより、二里ばかりも山かたづける里の人にて、僧に

布施

布施せんとて、此の町に、はたつ物もて出でうりて、其のしろを得て歸りける。道急ぐならひに、船をまちあへずして、上つせをば、かち渡りしけり。川の半ばにて、其の錢いれたるものを落としつ。水はやければ、とく流れいぬ。おひてとらんとする程に、深き淵に落ち入りて、やがていたづらになりにけり。人多くいできたりて、あげさわぐ。とかくすれど、いきたえにけり。わかきをのこの、よしなき僧にこゝろよせて、あたら身を、はぶらしにけり、などいふもあり。

わたり川しづみ行く身をよそにのみ、みよのほとけも、らめしきかな

くちさがなしとやいはまし。

こむ世をば、ねがふならひに、めのまへの、うきせにしづむ、身をやいとはぬ

さはいへ、いとあはれなる事なりや。母なるもの、ひとりありなりとかいふを、いかにかなしくまどふらん、とおしはかられて、其の心をよめる。

なき人の、よすがと見れば、落ちつもる、なみだのふちも、うらめしきかな

其の川をわれもわたる、いとはやき水に、さをさしわたすほど、いとおそろし。安樂寺繩手をすぐれば、日もかたぶきぬ。其のよは境木といふに、しれる人ありてやどりぬ。つとめて、思へばけふは七日になりけり。思ほえずも、あくがれあるきて、日數へにけるを、家人も今は待つらんと思へば、とくいとまをつげて立ちいでぬ。田原の坂をのぼるほど、松原

あり。先つとし、茸がりしつることを、おもひ出でゝ、

初紅葉、ふかめむほどに、おもふどち、又もとひこん、これの山ぢを

うゑ木の大路よりめぐりて、池田の里をすぎ、ひるつかたにやありけん、岡べの庵にかへりつきぬ。

文政三年秋〔二十九歳〕　源春臣

五九　金海山詣記

金海山　熊本縣八代郡、俗に西の高野山といふ

おれ〳〵し

八代郡、釋迦院のみたけは、此の熊本より九里の道にて、いとさかしき山なれど、皆人のものする所なるを、今までのぼらざりしは、いとおれ〳〵しき心地かなと、此の春はしひて、おもひおこして、いでたつ。さるは佛のとばりひらく事ありとて、まうづる人の、さはなるに、おほくは、もよほされたるなりけり。

三月二十六日　天保三年

三月二十六日。雨氣の空に、風さへ吹きしきれば、しばしためらひゐたるほど、人とひきて、酒のまむといふに、いとゞかけとゞめられて、ゐひのまぎれに、一ねぶりさへしつれば、午時も過ぎぬるなるべし。けふ過ごしなば又も障りやいでこんと、おもひはげみて、いそぎゆく。田向村より笛田宮のもりのなかを、ふみとほりて、

吹きならす、風のしらべも、おもしろき、笛田のみやの、森の松がえ

犬淵・木部などいふ所を、舟わたりして、隈庄の里をすぎ、小川

さ野のわたり
くるしくも降り來る雨か三輪が崎さのゝわたりに家もあらなくに（萬葉集）

のつゝみをのぼる程、雨ふり出でぬ。さ野のわたりならねど、くるしくもなど、うちすしつゝ、木原山を、右のかたに見やりて、

昔見し、木原の山の、いはつゝじ、いまもかはらぬ、いろにさくらん

此のわたりを、ふぢ山といへば、

花見つゝ、けふやくらさん、藤山と、名におふ所、まことなりせば

我が里より、かの山に上るには、大かた甲佐どほりといふをゆけど、小熊野の村に、しる人ありて、其のあたりをも、見めぐらんの心あれば、此の道へは、物しつるなりけり。人の教ふるまゝに、野中の森の杉むらをしるべにて、安見村といふを過ぎ、川づたひにゆく道、いとゝほし。

春の日も、くれがたちかみ、名におへる、やすみのさとを、たづに過ぎきぬ

かたしだ
下益城郡堅志田

山ざき村をへて、小熊野にいたるほどに、くれはてぬ。契りおきし、就粹法師がいほりをとふ。此のごろ說經しにとてこゝより一里ばかりひんがし、かたしだといふ所にゆきてあるを、いほもりの翁、せうそこしつれば、よふかくかへりきて、何くれの物がたりす。

淨水寺の碑

廿七日。よべより雨ふれば、みたけへは上らず。さて此の村は、昔淨水寺とて、古き伽藍ありける、其のあと今は、さだかならねど、ちひさきやしろある、もりのまへに、そのかみのいしぶみ、ふたつのこりてあるを、ゆきて見るに、忘れる文字は、

延暦云々
延暦二十年とある

よみつゞけがたけれど、延暦云々と、年月日のほかに見えたるぞ、いとめづらかに、むかししのばしきさまなりける。近きころは、いにしへしのぶ人のおほかるに、石ずりといふ事に、ものしたるも、こゝかしこに、もてはやせり。此の石わらはべなどののぼりて、ふみしたぎあそべるには、いとゞ文字のきえゆかむ事をなげきて、郡のつかさのはからひに、はしらたてゝ、やねのさまに石をおほひ、あらがきつきめぐらし、其の事しるしたる石を更にかたはらに、たてなどしたる、いとよろしき事になん。寺の名におひけむしみづ、いはねよりわき出でて、今もいときよらなる、すべて此のわたりの里人の水くむ所なり。さて此の寺の開基は、かの釋迦院とおなじひじりなりといへり。

打ちつけに、心すみけり、水草の、清き山べに、一夜やどりて

こゝより一里ばかりに、長谷寺の觀音とて、ちひさき堂のあるにも、とばりひらく事ありと、いふにまうで見むとて、たかあしだのまゝにて、山路こえ行くも、いとくるし。さはがみたうげといふ所に、松の五本たてる、其の蔭におりゐて見れば、西は天草の島々、宇土の山、八代のにひばりのつゝみ、めもはるゝにて、小川の里はまぢかく見ゆ。かへり見すれば、熊本の東なる國原、いとひろく、飯田山なども、はるかに見えたり。

五本の、松のしたかげ、いつも〳〵、見まくのほしき、をちの國原

長谷寺は、山たかくのぼる所にて、岩間よりおちくる水の、お

と清く、心すむべき所なるを、此の頃はくだものうる家、酒うる家、わざをぎするかりやなど、山にかたかけてつくりならべたる、いとさとびて心もとまらねど、たゞにやはとて、

春ふかく、しげるわかばの、かげさへも、あかぬみ山の、いさらゐの水

夕つかた、いほりに歸りたるに、あるじの法師、所につけたるさかなどして、酒薦む。いたうゑひて、打ちつれつゝ、此の山のうしろなる、あふみのはなと、いふ所をゆき見るに、こゝにも清き水わき出でて、岩のたゝずまひいとをかし。

おときけば、心さやかに、おぼゆなり、これやいさめの、しみづるならん

廿八日。小熊野を出づるついで、法師しるべして、相良義陽のおくつきを、見にゆく。こは甲斐宗運とたゝかひて、うちじにせし所なりとぞ、ひゞきの原より、中間村を過ぎ、山を上れば、鶴村といふあり。こゝより、小川にそひてくだり、小市野村より、中村にいたる、立岩とて、道のかたはらにあるは、よにひきうすといふものを、かさねあげたらんやうにて、數は九つあり。すべて此のあたりは、いはほそばだちて、けしきよき所なり。三つかひといふ所は、こなたかなたより、谷川のながれあふ所なるを、右にわたりて、かなたの川ぞひに、上れば、はらひ川村といふあり。一の鳥居といふには、ちひさきやしろたてり。右にのぼるは、四うら道なり。やゝゆきて、坂本村にいたる。こゝよりのぼる道、一里半ばかりを、みさかといひて、いとさかしくて、いきもあへぎて、くるしさい

はむかたなし、木のねをよぢ、いはかどをとりてのぼるに、たゞちに空をさして、ゆくがことし。坂中に牛の郷とて、石の佛するゐたる所あり。松にはかづら生ひ垂れ、ときは木ども深く繁りあひて、道をぐらく聞きなれぬ鳥の聲ども、をちこち聞こゆる中に、鶯のいとなつかしき聲に、さへづれば、

よの中の、春くれぬとて、うぐひすは、谷のふるすに、かへりてやなく

風に吹きをられたる枝どもの、道をさへぎりたるを、おしわけゆく中に、いとおほきなるが、根をさゝげて、よこたはりふしたる、其の下をくゞるほど、しらけて文字をかきたりけむから國の、いにしへ思ひやられて、いとをかし。上りをへたる所に、二王門あり。右にめぐり、暫しゆきて、寺にいたる。

しらけて文字をかく　鹿消の故事。十八史略卷一に見える。

すべて此のわたり、松・柏・檜・杉、ふかく繁りあひて、こゝろすごき所なり。そもゝ此の寺は、金海山・大恩敎寺といひて、桓武天皇の御代、延曆のころ、弊善といへる法師の、詔をうけて、たてられたるにて、いと盛りに、いかめしくて、よゝ久しくへたりしを、小西行長、宇土の城にすまひしころ、堂舍をやぶり、田どころを奪ひしより、いたくおとろへて、今わづかに其のあとを、のこせれど、なほむかし、しのばしく、よしありておぼゆる寺なり。八代のかたよりのぼる道、五家のかたへくだる道などもあり、こゝには、かりやいとおほくたてつゞけて人やどす所などもあり。こゝかしこ見めぐり、しばしやすらひて、本堂の後より、山をこえて、いはやの不動にまうづ。さてこゝろみの嶽と、いふを行き見る。やがて此のみねつ

五家のかた　五家の庄、俗に平家の落人の入つた所といふ

ついひぢ

づきにて、のぼりくだること、三丁ばかり、だゞついひぢなどをつきたらんやうなる、いはほの上を、つたひゆくに、せばき所はつるぎのはを、そらざまになしたらんがごとし。犬がへりといふ所は、まくだりに、くだる所にてあしもふみとめがたければ、立ちかへりやせましと、思ひしかど、こゝまでものして、ゆきをへざらんも、くちをしきやうなれば、しひてねんじて、いはかどにとりつきつゝ、からうじてくだりぬ。あるはは、あるはゐざりてゆく程、松風さへ吹きはらひて、まろびおちぬべく。おそろしさいはんかたなし。のぼりをへたるいはほは、少しひろくて例の石佛などもたてり。かたはらにいこひて、いきをつきつゝ、松の木間より見わたせば、はや崎の瀨門あたりまで、海原とほく、めのまへに、見えた

はや崎の瀨戸
天草と島原半島との間

るけしき、いはんかたなし。矢立とり出でて、いはほにかきつく。

西の海の、沖つ八十しま、くまもおちず、みさくる峰し、ともしきろかも

なぞこれのみふるびたると、われながら、あやしくおもはる。さてかへる道の、くるしさは、いとゞまされるこゝちす。國見嶽といふをめぐる程は、西北より東かけて、肥後の國のこりなく見ゆ。霞だにかゝらずば、溫泉岳のあなたより、長崎のかたまでも、望みつべくおぼゆ。やゝおりて、六地藏といふより、だゞに北をさしてくだる。山たかくして、鳥のこゑ、はるかにきこえ、谷ふかくして、水のおと、とほくひゞきたり。かのしなのぢの、きそのみさかも、はるかにおもひやられて、

まきのはの、しなぶしづくに、袖ぬれて、分るも深き、みぬの
しらくも

しろく咲きたる花どもの、おほかるに、をちかた人も、見えぬ
山路の、おぼつかなくて、

何ならん、なにならむとて、ながめくる、花の名とはん、しば
人もがな

うぐひすのいとおほくなけば、

鶯の、なくこゑしげき、谷のとや、くれゆく春の、とまりなる
らん

小田尾村は、なほ山のなかばよりも、上つかたなれど、こゝを
過ぎなば、日もくれぬべければ、かり人の、家のいとあやしき
に宿をかりぬ。此のあたりは、すべてあぶら火と、いふもの

をちかた人
うち渡す遠方人に物申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも（古今集旋頭歌）

なくて、かゞりのだいめくものに、松ともして、とかくのこと
すめる。むかしおぼえて、中々にをかし。

廿九日。小田尾より、なほ山をくだる。谷川のむかひなる
を、つゞらの原といへり。やゝゆけば、たる玉の瀧といふあ
り。道のかたはらなれば、ゆく手に見るもいとをかし。

あし引の、いはねしたゝる、玉水の、いくらつもりて、たきと
なるらん

佐又村・神崎村などを過ぎ、まく村といふにて、川をわたる。
こゝより砥用・矢部のかたへゆく道あり。坂ぬき村・めとき
村をすぎて、かへり見る山々、いとたかし。名をとへば、淺見・
から松・藤木などいふめり。ふたまた川の、はしのもとに、い
こひて見やるけしき、いとよし。川水きよくて、あゆののぼ

るなど見、きやかに見えたり。

はゝはゞしる、ふたまた小川、またもきて、わかゆつらましき

よき此の瀬に

佐間野のわたりして、甲佐路よりかへるとて、

山深み、春のゆくへを、とめかねて、あやなくけふや、家にか

へらん

けふの道八里、申の時ばかりに歸りつきて、例の見出だして、

めぐりきて、けふこそそれと、しられけれ、雲につらなる、を

ちの高山

天保三年三月〔四十一歳〕　　櫃園

六〇　樺島浪風記　上

むかし蒙古のえみしら、皇國にあたなひまつりて、西の國を

さわがしゝ時、には、はかに大風吹きおこりて、こゝらの船共を

たゞに浪のみくづとなしつるは、神の御しわざなる事、まを

すもさらにて、いとともかしこく、たふときことにこそありけ

れ。かくていにし、文政十一年八月九日の夜、はからずも大

風おこりて、浦々・里々を吹きあらしつるは、これはた神風な

る事は、阿蘭陀のえみしの船より、おほやけの御いさめの物

ども、のせもてゆかむとせしを、吹きかへし給へるにて、まこ

とに世に、いひなせることの如くなるべし。さるは其の風

のはげしく、あやしかりし事は、おのれも其の中にありて、よくしれるを、わが大人の此のかばしまの日記を見れば、更に心きもも、きえうせて、おそろしくも、めづらしくも覺ゆるなり。かゝる神風の中にありて、神の御ちはひを、うけたまへる大人の、御いのちはた、いともたふとく、うれしきことになんありける。こは其の人々のとへるまゝに、ひとつぴとつこたふるが物うきとて、とみに記し置きたまへるなるを、たびこひいでゝ、さくら木にのぼせつるは、なほ其の折のことども、くはしく、きかまほしくする人々の、ためにとてなりけり。

天保四年五月十五日　長崎の里なる　半田公麿しるす

去年　文政十年

長崎のゆきかひも、あまたゝびになりぬれば、くぬがぢよりも、ふなみちのいたつきなく、たよりよきに、こゝろひかれて、さしもかしこき、早崎の瀬戸も、いつしかわたりなるゝまゝに、風あれ、浪はふる日さへ、ことにもあらずおもひなしつゝ、心をやすめゐたりしぞ、いとはかなかりける。こたびは、去年の八月ばかりより、とゞまりて、例よりもひさしかりければ、しばし家にかへりて、母君をはじめ、人々にもたいめんせん、とおもひたちぬるに、此の里の御館の事、とりもてる志方之倫（ユキトモ）は、わがをしへ子なるにこたびつかさ、すゝみて、くにかへるが、やがて此の浦よりふな出すれば、うち〳〵にて、伴なはんといふ。いと嬉しきたよりなれば、其のこゝろにしたがひて、おなじ日に、長崎をたち、うちつれてのりぬるは、八

八月七日
文政十一年

月七日のひるつかたなりけり。従者どものわたくしの事したゝむるをまつとて、湊のかたへなる、大浦といふに、船をとゞめぬ。

此わたりを彼杵郡といへり。

とくはれて、追手ふかなむ、そのきの海、おきよりきほふ、風のうき雲

きのふまで、はげしかりつるも、けふはいさゝか、日のめ見えて、くれぬれば、月の影さへ、めづらしく見ゆ。

磯山の、松にほのめく、つきかげを、浪のまくらに、ねても見るかな

ほとゝぎすなきぬ。時ならぬも、中々にをかし。

こひよしも、たれにわかれを、をしみてか、ほどときすぎし、空になくらむ

八日。朝ごち、しづかにふきて、深堀のうみをおふ。

おひて吹く、船路しづけみ、をちこちの、山ばかりこそ、ゆくと見えけれ

松はしらずや
漕ぎて行く舟にし見れば足引の山さへ行くを松はしらずや（土佐日記）

松はしらずやなど、うちずしつゝくるに、にしの海ばら、見やらるゝしまく、霧のまよひもいとをかし。

磯山を、つゝめる霧や、朝げたく、あまのとまやの、けぶりなるらん

しほさゐ

野母のさきを、こぎめぐる程、立神（タテガミ）（地名）のいはほ、いとたかくそばだてり。

しほさゐの、あら磯なみに、けづられて、たてるいはほは、つるぎばなせり

時のまに、七里のうみぢをおふ。風ふきいでゝ浪たかし。

立神の、ゆづ岩むらに、打ちよせて、あらしをくだく、沖つしらなみ

もろこしの海は、しらなみ、雲をひたせり。北によりてはるかに見ゆるは、五島の山なめり。これやいにしへの、ちかのしまならん。南はうるまのしま、などいへるかたにやあらむ。それよりおくつかに、さま〳〵の島あるべし。かの阿蘭陀船の通ひくる、咬嚕吧（ザガタラ）などいへるは、南天竺のうちとか、其のかたしれる人どもの物語、かねてきゝおきつる、さる國國も、此方にあたるべしと、おしはかりに、思ふもおぼつかなし。東によりては、薩摩國なるべしといふ。眉引きなせる山だに見えず。たゞ此のみさきの、いはほのみを、わが日の本の、くにつちの限りなり、とおもふに、あらぬさかひに、來にけるこゝちしていと心ぼそし。

東のかたより、ひきくるしほはやく、風さへむかひたればこげども〳〵たゞしぞきにしぞく。からうじてこぎめぐれば、樺島見ゆ。こゝをめぐる船は、かならず此の島によせてしほをまち、風をうかゞふめり。みさきと、島とのあひだ、わづかに廿丁ばかりなれば、しほのはやき事、たぎつ瀬のごとし。目のまへに見えたる島なれど、いつはつべしとも覺えず。まがぢあまたして、こゝらの船人、力を盡して、やう〳〵漕ぎ入れぬるは、午時ばかりなるべし。碇おとし入れたる音も、いとうれしくきこゆ。こよひは、こゝにとまるべしとて、とまふきわたしなどす。夕つかた、さつまの國の、御船（ミフネ）三

樺島　長崎半島の南端に近くある

はつ

十ふねばかり、おなじくとまれり。こはおほやけの事にて、難波にものするなりとぞ。

九日。つとめて、薩摩の御船出でぬ。ふなうたうたひて、いとにぎはゝし。けふは、くもりみ、はれみにて、わが船はいでず。夕つかた、なぎさの家にゆきて、湯あみし、酒のみあそぶ。船人も、みなよび出でて、のませなどす。いみじう忘ひて、船に歸りぬるに風やうやうふきしきりぬ。島かげに、つなぎたるふねの、へづな、ともづなさへ、かためたれば、なでふ事かあらむ、とおもひてねぬ。船人も心つよげにいひて、みなねたり。

亥時

亥時ばかりより、雨ふり風はげしくなりて、かしらの上に、ちりかゝるしづくの、ひやゝかなるに、目ざめて見れば、とまもかつ〳〵吹きとられて、あらはなるに、船人たち騒ぎとかくしつゝ、いかり綱かためなどす。かゝるをり岸にちかければ、いはほにふれて、船そこなふなりとて、すこし沖のかたにくり出だしぬ。やう〳〵吹きまさるに、風おふわざとて、船こぞりて、ほう〳〵と聲の限りおらぶ。今は船よりおりてんとおもへど、いとくらくて、岸のほども見えわかねば、しばしためらふほどに、にはかに、火の事ありと騒ぐを、とまのひまより見れば、此の船より三丁ばかり上つ方に、繫ぎたる、大船のあなたより、火もえ出でぬと見えて、風につきて飛びくるほのほ、空にみちて、わが船にも、ほと〳〵おちかゝりぬべし。人々騒ぎたちて、よく見ればもゆる火にはあらで、なぎさのかたより飛びくる、光物なりけり。かなまりのおほきさな

おらぶ

かなまり

るもありて、空たかくくるめきあがるさま、おそろしなどいはむもよのつねなり。之倫とともに、手火とりて、船人のはたらきをたすけんとすれど、みなふきけたれて、ともしつけぬべきよしなし。今は岸にこぎよせて、みなとびおりんとの、こゝろがまへす。空はすみをすりたらんやうなる中に、こきうすき雲見えて龍（タツ）などいふ神も、かけるらむとおぼゆ。にはかに風のいきほひまさりて、雷（イカヅチ）のおちかゝるごとく、大浪の立ちかさなりくるに、えたへで、いかに〳〵と、船をさをせむれば、いまぞ驚き、かしこみて、ともづなも、とくきれて侍り。岸のほど遠く吹き放ちぬれば、いとくらきに、いづこにか、おりさせたまはんといふ。などしか遠くなるまで、つげざりつるぞと、はらだちいへどかひなし。大浪にたゞよひて、高き山にのぼり、深き谷に落ちいる心地す。此の風初めは、東風（コチ）なりしを、たつみになりてぞ、かくはげしくは、吹き頻りたる。みさき（地名）の浦より、たつみにあたれる島なれば、みさきの方へぞ吹き放ちゆく。おなじさまに、とまれりし船、百（モヽ）ばかり、ひとつ浪風に吹きあつめ、ゆりたゞよはす程に、かたみに打ちあひてやかた、ふな棚、かつ〳〵くだけちる。右のかたより、三の大ぶね、舳をならべて、つきあひたるにまづ之倫が鎧櫃、くだけてさながら海に入りぬ。かこども其の舳にとりつきて、いのちをかぎりに、おしはなたんとすれどもふみしむるふないたは、雨そゝぎて、なめらかなれば、すべりにすべりて、ちからいです。二たび三たびも、つきあふほどに、わが船のせがひは、ことゞくくだけぬ。いかりづなど

たつみ

せがひ

もを、猶引きたる船のあれば、かくひとつには、あたりあふなりとて、綱きりてよとさけべど、かなたの船には、人ありともみえず。こしがたな、ひきぬきて、ひとつふたつは切りすてぬれど、猶大きなる船どものうちよせつきあふ程に、今はちからつきて、かなたの船に、飛びうつりのがるゝもあり。後にきけば、此の人どもはみなしにけり。左のかたのみ、事なかりつるに、めりめりといひて、くだくるを見れば、舳のかたさけたる大船のわがふねのや、かたの上に、浪とともに、おしあがりくるなり。わがふね、たちまちかたぶきて、今一ゆりに、海の底に入りなんとすれば、あはやとて、われも人も、浪の中にとび入りぬ。

さるははじめ、よろひびつのくだけぬるほどに、船長（フナヲサ）いみじきおもゝちして、おづ〳〵いひけるは、いとかしこき事に侍り。かくいみじき風に成りぬべしとは夢にも思ひより侍らざりき。多くの船ども、かくくだけもて行きぬれば、今はあやふきをりにはべり。御心がまへせさせたまへといふ。

くだけもてゆく

とくより、さは思ひをるぞとて、船ばたには出でたちぬれど、いと暗き夜に、破れたる船どもの、浪のまに〳〵、打ちあひただよふめれば、事なくおよぎあがるべくもおぼえず。さりとて、船と共に、いたづらに成りぬべきにもあらねば、今はいのちをかぎりに、およぎ見てん、かゝるをりに、とかくの物を、身にそふれば、中々に浪をわけゆく、さまたげなりと、之倫とともに、いひあはせて、きぬぬぎすて、たふさぎの上に、帶をゆひかため、短かきかたなひとつさして、ふな板一ひら、わきば

さみもち、今や飛び入りてんと思ふほどに、此の大ぶねには、おしかたぶけられたるなりけり。暗き夜なれど、光物空にとびわたりて、ほのかに岸のほども見ゆるは、三十丈ばかりもあるべし。同じくとび入りたる人々、いづくにおよぐらむともしらず。筏のやうなるものゝ、浪のまに〳〵、たゞよひくるを、見つけたるは、いとうれしくて、とかく泳ぎつゝ、浪をかくに、やがて其の物にとりつかれたり。たゞにはひのりて見れば、竹をあみたる物なりけり。こは此のあたりにて、かけといひて、岸より海の上に、すのこの如くつくり出だして、鰯を干す物なるが、浪にそこなはれて、たゞよひゐたるなりと、後にぞきゝつる。

此のものなかりせば、かならずしぬべきを、神のみちはひは、ありけるになむ。猶岸遠ければいかならむと、しばしいきづきをり。おなじく、はひのりたる人四たり。やう〳〵岸の方に、打ちよするを見るも、たゞ此のひかりものゝみぞ頼みなりける。今は十丈にもたらすなりぬるに、岸よりかへる荒浪につれて、又も沖の方に、出でぬべく見ゆれば、さらに浪の中に飛び入りぬ。命を限りにおよぐほど、力つかれてあやふきに、たちまち大なみ打ちきたりて、海のそこにしづみぬとおぼゆるに、大きなるいはほに打ちつけぬ。やがて其のいはほに、かたくとりつきたる程に、浪は引きもてゆきければ、いそぎはひあがりぬ。たゞ夢のやうにて、ものもおぼえず。之倫をはじめ、人々はいかならんと思ふにふりそぐ雨、ふきしきる風、立ちきほふしほけぶりに、いきもつき

あへず、たふれまどふ。こなたかなたのいはほより、おなじくはひあがる人々の、おらびさけぶこゑ、浪のおとにもまされり。なきまどふ女のこゑもきこゆ。わが船なる十人ばかり、やう〳〵よびかはしあつまりて、家あるかたへゆくに、かつ〳〵風にふきたふされて、おもてあぐべうもなし。からうじて、伏屋めくものみつけて、人々おし入りたるに、やがて其の家も、ひしめき倒れんとすればまたもたち出るほど、たふれまどひて、ちり〳〵になりぬ。浦わの家ども、かつがつたふれて、やねいたの瓦などの、ちりくるは木葉のごとくにて、かしらもうちくだかれぬべし。

やう〳〵火の光、見えたる家に、入りて見れば、しらぬ人三十人ばかり、おしこりゐたり。衣ぬぎて、しぼりゐたるもあり、あるはは、だかにて、ふるひわなゝぐなど、たれもおなじさまにて、うとましといはむも、よのつねなり。あるじは、はなれむとする戸をおさへありくに、火たきゐたる女も、立ちはしりさわぎまどふ。又此の家も吹きゆるがせば、いかできのふゆあみし家にゆきて、之倫をも、尋ねばやと思ひて、とかくたどりゆくに、おほくたふれたる家どもはしら、うつばり、よこたはりふして、足もふみたてがたし。すこしよろしき家、見つけて入りぬるは、之倫が従者とおのれとふたりなりけり。こゝには人もすくなければ、はひあがりて、ほだの火さしそへつゝあたる。あるじいたはりて、おのが衣とりいでて、きせたる、袖もなくて、あやしげなるも、いとうれし。二三人ゐたるは、ことくに人、おなじく船やぶれたるなり。か

いかて

あやげ

かるさわぎの中にも、あるじなさけありて、今はいかゞは、したまはん、いのちだにあらばなど、なぐさめつゝ、にごれる酒あたゝめて、すゝめなどしたるに、すこしこゝろおちゐて、

ちはひ

かけて祈る、神のちはひし、なかりせば、海のみくづと、成るべかりけり

てうど

とぞおもひつゞけゝる。曉ちかきにやとおもふほど、浪風のひゞき、山も殘るまじうとゞろきたり。船はいかに成りぬらん、さりとも、みながらはくだけはてじ。なにくれのてうどども、ひとつだに身にそへず。いとあさましきことにもあるかな、とおもひつゞけつゝ、かくていのちの、またかりしうれしさにかへて、よろづの心うさをおもひさます。なほわがふねの人々を、たづねまほしきにも、よのながきこと、

こゝろもとなし

千よを一よのこゝちす。

やう〳〵あけがたに成りぬれば、少し風しづまりぬるに、之倫が從者は、あるじの身のうへ、こゝろもとなしとて、たづねゆきぬ。板戸のひまの、しらみゆくを、すこしあけて、おきの方を見れば、白浪たかく空にみちて、たちしきるに、しほけぶりは雲のごとく、山々にたなびきゆくさま、いはんにもことのはおよばず。繪にもかきあへじとぞおぼゆる。浪のひまより見ゆる小島には、もゝあまりの人あがりゐて、こなたにむかひて、たすけよといふさましたり。又そのかたはらなるいはほにとりつきゐたる二人、をり〳〵浪の上に、あらはれて見ゆるは、えもあがらぬなるべし。船はひとつだにのこらず、流れうせて、高き岸さへくづれたる、見るもすゞろ

すゞろ

にて、心ぎもゝきえうせぬ。明けはてぬれば、とかくして、きのふのやどりをたづぬるに、家みな倒れて、いづこともわかず。からうじて見出でたれば、之倫をはじめて、二十人ばかりぞ、こゝにはゐたる。いとうれしく、かたみにかほ見かはして、こはいかにといひたるのみにて、ことばもいでず。今ぞ人々も、岸に出でゝ見る。立ちあがる浪の色も、けさはうらめしう見ゆ。わが船の人總て二十九人なりける。こなたかなたより、やう〳〵出できて、二十一人ぞありける。殘れるは、之倫がすさ一人、かこ七人、こゝかしこたづぬれど見えず。此の島人どもは、破れのこりたる船みつばかりして、かぢあまたたてゝ、かの中島なる人々を、たすけんとてこぎゆくに、なほ浪たかければ、ふねすゝまず。たゞおなじ所にたゞよへり。島なる人々、まづのらむとあらそひおるゝに、のりあまりて、又いはの上に、かへりのぼるなど見ゆ。からうじてたすけのせたる、そのなかにも、わが船の人はなし。さはいたづらになりにけんと、おもひはつるも、いとあさましし。かこのなかに、おや子ありけるが、おやは、はやくおよぎあがりしに、子のあがらぬをいかならむとて、又も船のかたに、泳ぎゆきつるを、見し人ありけり。さながら出でこぬは、おや子ともに、しにけるなるべし、といふも、いとあはれなり。けふ此の島にありて、かたみにうき事ども語りくらす。はだかなる人のみなれば、あるじの衣はさらなり、むすめのをさへ、とりいでゝきせたる、あかき袖口より、毛おひたる、くろき手をさしいでゝ、とかくの事するさま、今ぞめにつきて、い

とをかしく、かたみに打ちわらひぬ。折しも、かたへなるものゝ中より、人ひとり出できたるは、うせつるかこなりけり。よべこゝまでたどり來て、こゝちかきくらしつれば、さながら此のものゝ中に、うちふして、今ぞ目さめぬるといふ。いとけしからぬをのこも、ありけるかなと人々つまはじきして、かつあざみ、かつよろこぶ。たれも〳〵、よべはしらざりしを、けさ見れば、身うちこゝかしこ、きずつきいたみて、また き人もなし。あがりし人々、すべて一島にみちたれば、はつかなる島の中よねつきぬといふ。さるは此の風のけしきによりて、もたる人は、藏にこめて出さぬにや、などいふも、いとにくゝおぼゆ。せむすべなくて、そうめん、といふものをもとめてくふ。それもつきぬれば、かこども、山ばたなるい

あざみ

はつかなる

もほりて、もて來ぬ。酒をだにと、もとむるに、それもなしといふは、いとこゝろぼそし。けふは、むかひの浦に、船もかよはねば、すべなくてくらしぬ。

十一日。海のけしきなほりぬ。此のさわぎを、人して長崎の御館につぐ。よねのことなどをもいひつかはす。又國につぐるふみ、かきなど、事しげし。あやしきすゞり、とりまかなひたるを、こゝかしこ、とりわたして、人々家にもふみかきなどす。之倫は、おほやけの事なれば、此の島にありて、國よりの迎への船をまつなり。おのれは、わたくしの旅ぢなれば、一たび長崎にかへりて、ころもなどとかくして、國にはかへらむ、と思ひなりぬ。やう〳〵浪なぎぬれば、むかひの浦にわたる。之倫にわかるゝも、おもひかけぬ事にて、今さ

とりまかなひ

らにこゝろうし。

やぶれたる船どもはむかひの浦々に、うちあげたれば、てうどなどの、うちよせたるもやあると、こと人々も、あさりにとて、おなじ船にてゆく。かの小島のもとを過ぐるに、岩の上には、船板ども、かずしらずうちあげて、綱どものこゝらひきはへられたる、たゞあくたなどの、よりたらむやうなり。みねの松の大きなるも、あまた吹きをられたり。また根よりふきうがちたるは、いはほをさゝげて、まろびふしたり。みさきの浦によすれば、人あまた出でゐて、流れよりたるものをとるなり。わが船なるも、うちよせつらめど、かくてはやく、ぬすみとられぬるべし。さりともと、すなごかきわけつつ見るに、衣のやれそこなはれたる二つ三つ、さては之倫が刀ひとつぞ出でける。わが調度は、一つも見えず。年ごろ長崎にてよみつる歌、つくれるふみ、考めくものをあはせて、こゝらのふみ、もくづと成りにけり。わが船のほばしらも、ふたつにをれて、こゝにあり。なほこゝかしこ、あさる程に、しに人のかばねをぞほり出でたる。よしなき事なりや、とてやみぬ。後にきけばかのしま、此の浦にて死にける人々、すべて三百人にあまりぬとなん。

かくて人々にわかれて、長崎へかへるも、ゆめぢを、あゆむこちす。道にて、かの御館よりのつかひ、ゆきあひぬ。長崎のことゞもをきくに、風のさわぎ、かしこもいといみじく、わが國の御船ふたつも、やぶれくつがへりて、三十四人いたづらに成りぬといふに、いとゞおどろかれて、たゞ急ぎにいそ

ぐ。七里の山路のいとさかしきに、小屋ども、みなたふれふして、いこふべきかたもなし。道すがらおほきなる木どもの、なからより、吹きをられたるをみるに、風のいきほひ思ひやられぬ。田どころには、うしほさし入りて、つゝみも崩れ、道もたえぬれば、あらぬ山畑の中などをたどりゆく。今朝より物くはで、いたうこうじぬれど、をしものうる家もなければ、木のみなどとりはみて、ひつじの時すぐるころぞ、からうじて長崎にはつきぬる。こたびは心やりの日記ものして、歌どもかきてむと、いさゝか筆おこしつるも、うみにしづめぬれば、後におもひいでゝ、かばかりかきつけぬるも、いとくだ〳〵しう、よみがたきは、こゝろまどひのなごりなるべし。

おもひきや、いそぎたちにし、浦なみの、おなじなぎさに、かへるべしとは

文政十一年八月〔三十七歳〕　中島廣足

六〇　樺島浪風記 下

八月十一日の夕つかた、長崎にかへりつくほど、大浦の方より見やれば、海かたづける家々は、みなくづれて、ありしおもかげもなし。まづ近く見えたる阿蘭陀館、うみにのぞめる高樓、なかばよりくづれおちたり。入江の方を見れば、こゝの船どもは、さら也、阿蘭陀船・唐船の大きなるも、むかひの山ぎはに、吹きあげられたり、と見ゆるは、いかならむ。市のち

光輔　近藤光輔、會所役人廣足の親友

永章　青木永章諏訪の宮司、廣足の親友

または、人たちさまよひ、たふれたるまがきおこしなど、何くれと、らうがはしきに、いそぎて光輔が家につきぬ。さきにも、こゝにやどりつればなり。あるじまづおどろきて、いのちまたかりし事をよろこぶ。

やがてせうそこしつれば、永章をはじめ、人々とひ來て、ありしさまどもとひきくに、大かたの事ども、ものがたりぬ。さてわが肥後の御たちいかならんと、たどる〳〵ゆき見るに、つかさ人をはじめ、こゝらの人たちさわぎ、物にぞあたりまどふ。三十四人のかばね、かつ〳〵探り出でなど、おほやけにも、其のよしを申し、又肥後にも、つぎ〳〵使をたて、又かの樺島よりの、つかひも來あひて、米の事いふに、やがて船雇ひて、たはらつみ入れ、これにも、なにがし、くれがしのりてゆくなど、よるともいはず、いと騒がし。とかくして、此のよは、光輔がりかへりてねぬ。さてこれよりしばし、長崎にとゞまれるほど、見もし、きゝもしつることゞもを筆のまに〳〵、日をもしるさず、かきつけつれば、打聞のやうにもなりて、いとどみだりがはしくなりにけり。さるはとく故郷にかへるべきを、人々しひてとゞめて、なにくれのわざするに、深きこころざしも見ゆれば、それに違はむも、くるしくて、故郷には、其の由いひつかはす。かなたにも、此の騒ぎども、とくきこえて、心もとなさに、ずさおこせたり。一日二日とゞめてかへすにも、いよ〳〵くはしき事ども、文かきて告げぬ。

○わが國の人、三十四人死にける折のさま、くはしくきゝつることゞも、こゝにかきつく。此の浦にかねて繫ぎたるわ

が國の船ふたつは、おほやけの御さだめにて、江戸よりくだらるゝ、つかさ人たちの、阿蘭陀船の出入、また西泊、戸町の、浦の守部のさま、など見めぐらるゝをり〳〵、のらるゝなり。年毎の五月ごろより、九月の末つかたまで此の浦にはつなぎおくめり。さて其の夜、風烈しくなるにつけて、綱どもかためゐたりしに、にはかに大浪うちよせきて、ひとつの船はたゞにくだけて、ゆくへしらずなりぬ。ひとつは、さながら覆へりて、うつぶしになりぬ。其のうつろなる中に入り居て、あくる日の晝つかた、いできたりし人七人あり。其の中なる高野某は、おのれしれる人にてかたりけるは、大浪のうちきたるとおもふに、たちまち船くつがへりぬ。とかくして、船のまなかなる、すこしうつほなる所にいたるに、なにくれの板ども、うちちりかさなりて、身をいるべきひまもなきを、からうじてかきわけつゝ、さし出だすかしらは、船の底にぞあたりぬる。やがて横なる木にとりつきて、しばしいきつきゐたるに、おなじさまにて、こゝかしこより、より來る人人、あはせて七人なりき。浪きたれば、頭にかゝるを、あふぎていきをつきぬ。かくしてある事、いと久しきに、たすくる人もなし。やう〳〵浪しづまりぬるに、みなそこに、いさゝか光の見えければ、夜や明ぬらんとて、おのれひとり、こゝろみに其の光をしるべに、みだりがはしき物ども、かきわけつゝ潜り出づるに、やがて船の外へぞ出でぬる。日は高くさしあがりて、巳時ばかりなりき。其のまゝに船腹に、はひあがりて、ふみとゞろかしつゝ中なる人々にちからそへぬ。

巳時

此のをりしも、あたりにゐたるあまのをぶね、助けのせむとてさしよするを、今はいとたけく、おもひなりて、なにかは、いましらにたすけられむとて、御たちまで三丁ばかりの海を、たゞおよぎに、およぎ來りて、しか〳〵のよしを、つげゝれば、やがて、小舟より、斧などもたらしゆきて、かへりふしたる船ばらを、きり穿ちぬれば、中なる六人は、其の穴よりはひ出でぬとなむ。いとあやふき、いのちいきぬと、人々もおどろきよろこびぬ。またこゝかしこの浦に、うちよせられ、あるはおよぎよりなどして、あがりし人々をあはせて、三十人ばかり、其の外の溺れうせたる三十四人、あるは、いはほにて、かしらうちくだきなどしたるもおほかりき。又そのよ、こゝかしこに、ひかり物の飛びけるを、見し人あまたありき。なにがしの社の前に、くだものうる家ある、そこのおうなは、此の光物にあたりて死にけりとぞ。こはかの樺島にて、飛びつる火におなじかるべし。

○たふれたる家は、まづ御社にては、諏訪宮の廻廊・舞臺。寺にては崇福寺の唐門、また春德寺の本堂・樓門・鐘樓。さては、佐賀の殿の、濱べの御館、石ついぢよりはじめて、こゝらの殿くづれたり。阿蘭陀館の高樓は、さらなり、藏町さへ崩れて、こゝらの物ども海に入りぬ。其の外こゝかしこのついぢ、まがきなどの、くづれたるは、數へもあへず。いとめづらかなる事は、むかひなる、いなさの濱にゐたりし、あまぶねのをのこは、かの佐賀の殿の、まらうどゐの床の上に、打ちあげられていのちいき、今一人は、ゆかの下に、打ちいれられて、これ

もいきたりしとぞ。

○阿蘭陀船の、さばかりおほきなるも、碇づなたえて、稻佐の濱なる、志賀某が家の、門の前のなぎさにぞ吹きあげたる。そも〳〵阿蘭陀船は、浪風はげしければ、いかりづなを、いとながくのばして、浪をうくることを、やはらかにして、かつて綱をたつことなし。かれ、こたびも、しかしつれど、沖にかゝれりし、唐船ふたつ、ながれかゝりしかば、三つの船のおもさには、えたへで、つなたえぬとなり。唐船は、すべてみつ、つなぎゐたりし。二つは、此の阿蘭陀船より、西なる入江にふきいれて、ひとつは、いはほにて、ふなばらをつらぬき、ひとつは、深江のうらの、おくつかたなる、正德寺といへるてらの、山べに吹きつけたり。唐船どもは、とかく事はかりて、程もなくひき出だしうかべぬれど、阿蘭陀船は深くひぢの中に、すわりて、ゆるがねば、さま〳〵にしつれど出だすべき由なし。

ある人ことはかりして、なぎさに、此の船をこめて、大きなる堤をつき廻らし、潮をくみいれて船をうかべ、やう〳〵引き出さんとて、よるひる其の事はかれども、うき出づべくも見えず。さて此の船どものかゝれりし所に、小船二つにて、守部をおかれし、四たりの人は、いたづらに成りにけり。

○かの樺島よりも、たよりありて、之倫がもとよりも、をりをりせうそこするに、うせにし人のかばね一つだに出でず。たゞ之倫が從者のみ、碇づなにまつはれて、岸ちかくしづみゐたりしとぞ。かしこはあらうみなれば、みなおきのかたに、流れうせにしなるべし。あはれ、われも其の中に入るべ

わくらは

かりしに、わくらはにもと、思ふもいとうれし。さて長崎のうらの死人は、さしもおほからねど、佐賀の海べは、いとおほかりけり。すべて此の君の領したまへる、浦々里々のしにびと、一萬三千にも餘れり、といへり。まして田・はたけ・川づつみの、くづれたる、かぞへもあへざるべし。わが國にては、こゝの浦の船なるを合せて、死人百ばかりなりき。此の風東北に吹きもてゆきて、赤間關あたりにても船破れたること二千ばかり、家たふれたるは、かずしらずとぞ。其の外傳へきゝたることども、めづらしくもおそろしくも、さま〳〵なりしが、さのみは、うるさくてしるさず。永章は烈風記とて、ものするよしなれば、おほくはもらしぬ。此の風、阿藝國あたりまでも、吹きぬといへり。

阿藝國
安藝國

○こたび吹きしをられたる木ども、ほどなくわか葉さして、青やかに見ゆるは、いとめづらし。竹はあからみかれて、あらたに、たかうな生ひ出でたり。また、梅・櫻・桃・梨・やまぶき、など花さきて、春のにも、をさ〳〵おとらず。桃・梨などは、みさへなりぬといへるは、いよ〳〵あやしくこそ。

○おなじ月の廿三日の夜なかばかりより、またもはげしき風ふきいで、雨さへふりしきりて、さきの夜にも、をさ〳〵おとらず。まことに世はつきぬる、にやとおぼゆ。されどかの大風にあひぬる後は、いつしか、なれたるやうにて、とかくしつゝ、夜をあかしぬ。翌るあした、西になりてぞ、吹きたえぬる。さきの風にゆるぎし家、山々の大木ども、たふれたり。されどこたびは、うみはしほひたるほどなりければ、ふねく

つがへせしことは、いとすくなかりき。さるは人々の、心がまへもことなりけむ。

○今年は、いかなるとしにかありけむ。西東の國々、風ふき、水あふれて、田・畑は、さらなり、家をたふし、橋をながして、いたづらになりぬる、人おほかりけり。東國のことどもは、みなきゝつたへたるなれば、たがへるもあるべければ、こゝには しるさず。西國にては、我が肥後の白川、六月七日の晝つかた、雨もふらぬに、には かに水出でて、熊本の町なかに及びぬ。阿蘇の川上より、十三里ばかりが程、おぼれしにける人、七十人ばかりなり。此のをりおのれは、長崎にありしを、わが家は此の川きしにて、あともなくなりにけむと思ひしを、事なかりつと、家人よりいひおこせぬるも、いとうれしかりき。

長崎にては、卯月のなかば、いみじくなゐふることありき。其の後は、事もなかりしに、かばかりはげしき風の、ふかむとは、たれかはおもひよらむ。老人なども、こたびばかりいみじき風ふきて人おほくしにけることは、つたへもきかざりつとぞいひける。

○まことや、かの樺島に、とまれりしよひのほど、月おもしろかりしに、とく入りぬれば、

　漕ぎめぐり、此のしまかげに、とまらずば、浪にかたぶく、月も見ましを

とか、よみつる。いまおもひいでぬ。

○九月十六日のあした、長崎をたちて、故郷にかへる。忠英・光鎮、日見の山路までおくりきたるは、心ざしふかくみゆ。

殊なく
形容詞

まづ立ちいづるほど、

此のたびは、殊なくもなく、故郷に、みちびきまさね、なかちはの神

此の人々にわかるとて、

おもひきや、おなじ浦わを、行きめぐり、ふたゝびかくて、わかるべしとは

山をくだりて、矢上の里にいたり見るに、いにし風のよ、あばの浦より、しほさしのぼりて、里中におよび、又其の夜しも、火もえいでゝ里の家、なからばかりは、やけうせぬ。

しなつ彦、神のあらびに、かぐづちの、御たまさへにも、さそはれやせし

こよひは、江浦にやどる。此のごろのうれひも、すこしやみぬるこゝちして、

心うき、浦わはなれて、秋深き、野山の色を、身にぞしめぬる

さすがに秋のけしきは、たゞならず。

○十七日。夜をこめて出でたつ。宇喜の山路にかゝるほど、かへりみる、梢はるかに、月おちて、朝霧ふかし、しのゝほそみち

宇喜の里、うみべの家は、みなながれうせぬ。

船ならぬ、あまのとまやも、浦なみに、うきのさとこそ、あとなかりけれ

あまたゝび、わがゆきかひし、里の名の、うきは今こそ、身にしられけれ

いづこも〳〵、くづれぬ家なく、たふれぬ大木もなし。唐子

くづし出て

といへる里にて、

世をわたる、わざをからこの、里人も、かゝるうきには、あはずや有りけん

此の夜は、多比良の里に宿る。豐前中津の殿人、ふたりあひやどりして、あすおなじ船にて、わたるべしとちぎりて夜がたりに、かの樺島のはげしかりし事どもを、くづし出でつれば、いみじうおそれたるけしきなりき。

〇十八日。朝とく打ちつれて、濱べに出づれば、風あれて、雲のけしきたゞならず。白浪高く立ち渡りて、しほさきに繫ぎたる小舟のほばしらは、横ざまに、ふりたふしぬべく、たゞよひたり。中津人は是を見て、われらは心やりの旅路なり、けふしも、此の海を渡らでもありなん、とてやがて、やどりへ立ち歸るは、よべの物語に、おぢたるなるべし。おのれは故郷にいそぐ心とゞめがたく、かつ浪風のさわぎも、やゝなれぬるこゝちして、さばかりの事にも、しなぬいのち、こゝにてしぬべきにもあらじなど、われだけくおもひなしてのりぬ。もとよりおひ風なれば、帆をあぐるまゝに、たゞ矢をいるやうなり。ちひさき舟なれば、しらなみ、さゝとうちこゆるを、雨ぎぬ引きかゝぶりて、うづくまりをり、またゝく程に、七里のうみぢを、事なくわたりて、長洲の浦につきぬ。

なほ〳〵しきこと

けふわたる、多比良の海の、たひらかに、家に歸らむ、ことのうれしさ

となほ〳〵しきことをぞいひける。いそぎつれど、高瀨の川わたりて、日くれぬ。二里ばかり夜みちをゆきて、植木の

おなじ年
文政十一年

里にやどる。

○十九日。けふは、たゞ三里のみち、さしもいそがねど、巳時ばかり家につきぬ。はかなき草のいほの、風ふきあらしたるも、おもひしやうには、なかりけり。

吹風も、おもひいたらで、過ぎつらむ、ふかきむぐらの、露のしたいほ

をりしも、軒なるくるみの、ほろ〳〵とおつるに、

おのづから、おつる木のみの、音にだに、風ふきくやと、おどろかれつゝ

ありしのちは、物おぢのみせられてなむ。

おなじ年のかみな月のはじめにしるす。

* * * *

大平
本居大平

浪風記拜見。かへす〳〵めづらかなる、そのをりの事見るが如く、おそろしく、おぼえ侍り。　大平

こたびの大風は、まさしく神風なりと、世にいひながせるは、さる事ありけり。かの阿蘭陀船は、こたびかへるべきときにて、其の船の中に、わが國の地圖をはじめて、外國にわたす事を、いみじくいましめたまふ物どもを、たれか取り傳へけむ。くさ〴〵つみいれ、物しゐたるを、此の大風にあひて、船をふきあげられしかば、やがてこなたの、司人たちゆき見て、つみ入れたる物どもとりおろし、とかくせらるゝついでに、さる物ども、皆あらはれ出でて、こと〴〵におほやけに、めしあげ取り收められぬ。さて其の事物せし紅毛人は、いみじ

き御かうじにて、ふたゝび此の國に、來ることを止めたまひ、こなたの人はた、それにかゝれるは、ほど〳〵に、つみなひたまひぬと、後にきゝつるは、まことにか。こをおもへば、こなたの人々の死にける數、わがともがらの、うきめ見しは、いふべき事にもあらず。かの蒙古が船を、吹き破りし、むかしの神風も、其のあまりには、近きわたりの國々、浦々なる、こなたの人ども、船どもゝ、そこなひつらめど、おほきなるところより見る時は、そは物のかずならぬ事になむありける。天保四年正月十五日。　櫃園のあるじ、長崎のたひやどりにて、ふたゝび此のよしをしるしぬ。

櫃園文集抄
定價壹圓

昭和九年四月十日　印刷
昭和九年四月十五日　發行

編者　彌富破摩雄
發行者　東京市麻布區笄町一七六番地　立木朋吉
印刷者　東京市牛込區早稻田鶴巻町一〇七番地　吉原良三

康文社印刷所印行

發行所　東京市麻布區一本松町廿七　電話高輪(44)一七六〇番　新撰書院
發賣所　東京市麻布區一本松町廿七　振替東京六四九五二番　大岡山書店

412